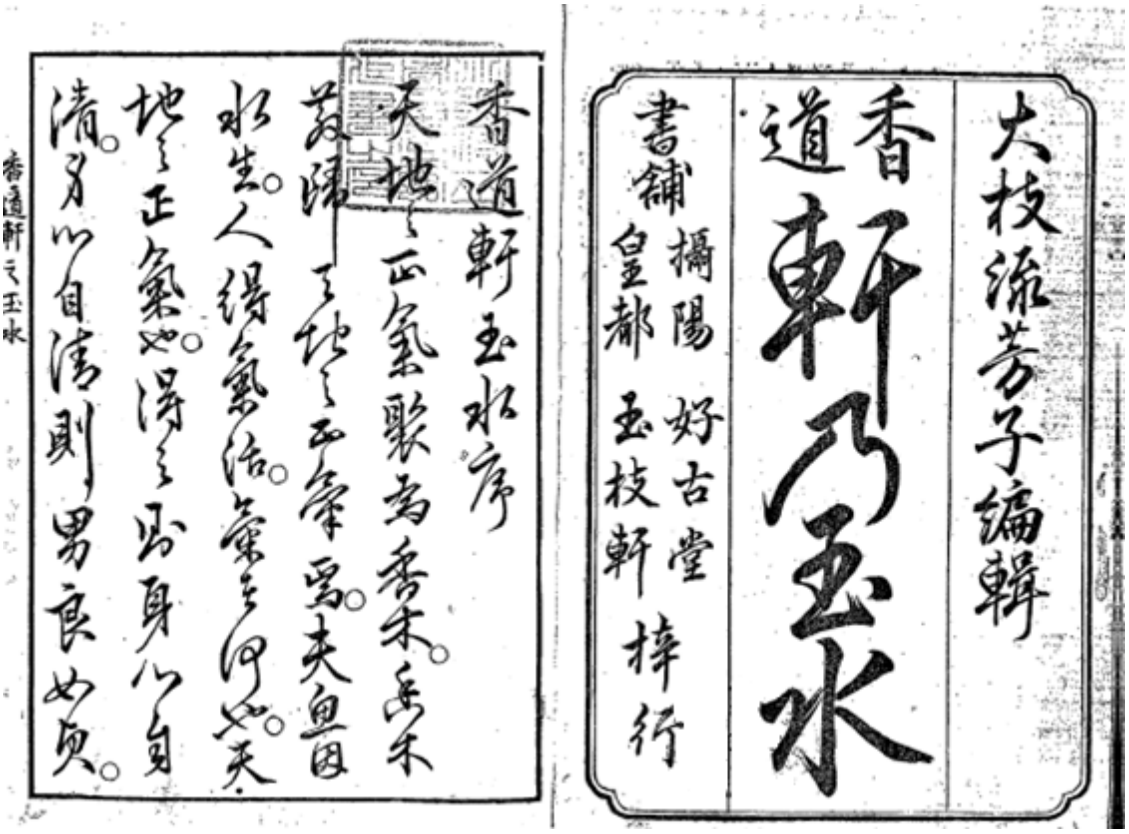


大枝流芳子編輯

香道　軒乃玉水

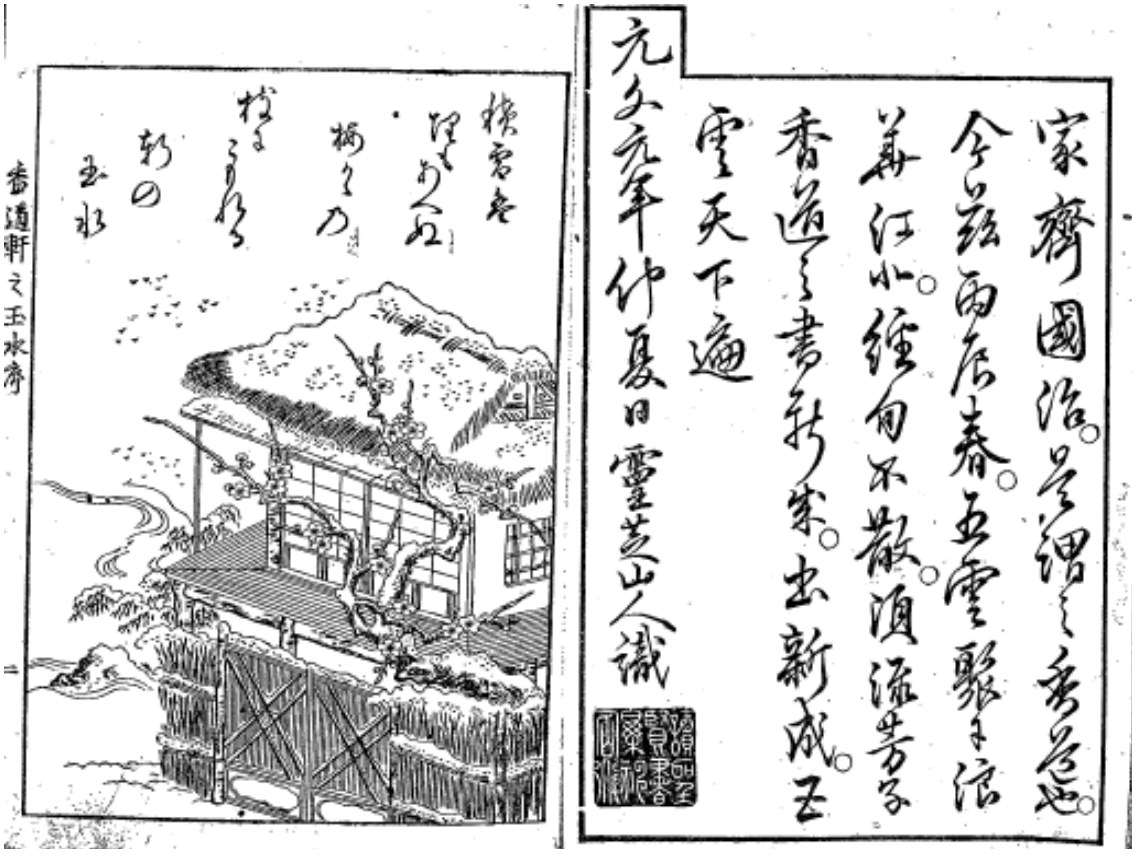
書舗　摂陽　好古堂
　　皇都　玉枝軒　梓行

大枝流芳編　元文元年二巻二冊　版本
大阪府立図書館　所蔵

香道軒玉水序

天地の正気、聚(あつ)まりて香木を為す。
香木、散りて天地の正気に帰せり(焉※)。
夫れ、魚、水に因りて生き
人、気を得て活く
気、何に在らんや。天地の正気なり。
之れを得て則ち身心清し。
身心、自ずから清ければ則ち、男良く、女貞(さだ)し。

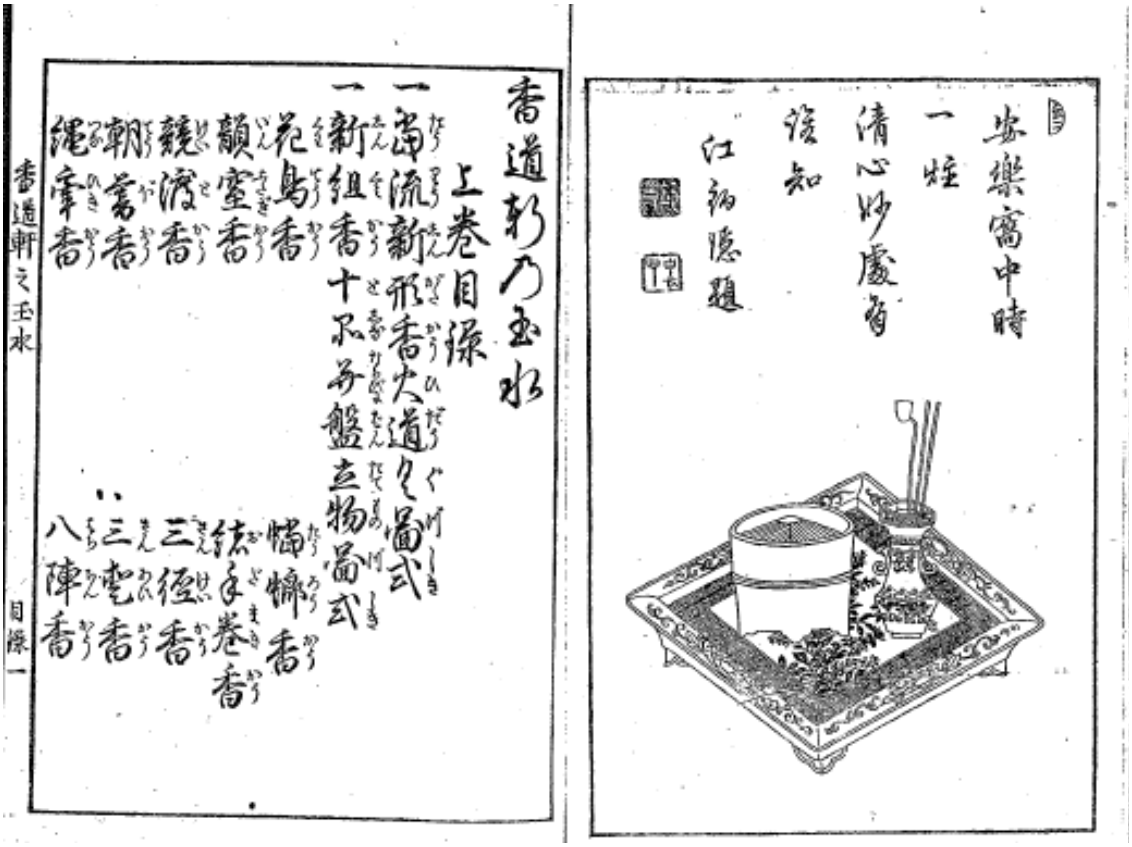
※　語や文の終わりに置いて語調を強める「置き字」



家齋(おさ)まり、国治まる。
是を之れ、「香道」と謂うなり。
今茲(こんじ)丙辰(へいしん→ひのえたつ)の春。五雲、浪華江北に
聚まる。旬(とき)を経て散ぜずは、
須く、流芳子香道の書、新たに成るべし。
書、新たに成らば、五雲、天下に遍(あまね)かむ。

元文元年仲夏日　霊芝山人識　押印

積む雪は
　埋もりもあへぬ
　　梅がか(香)の
枝にこもれる
　軒の
　　玉水



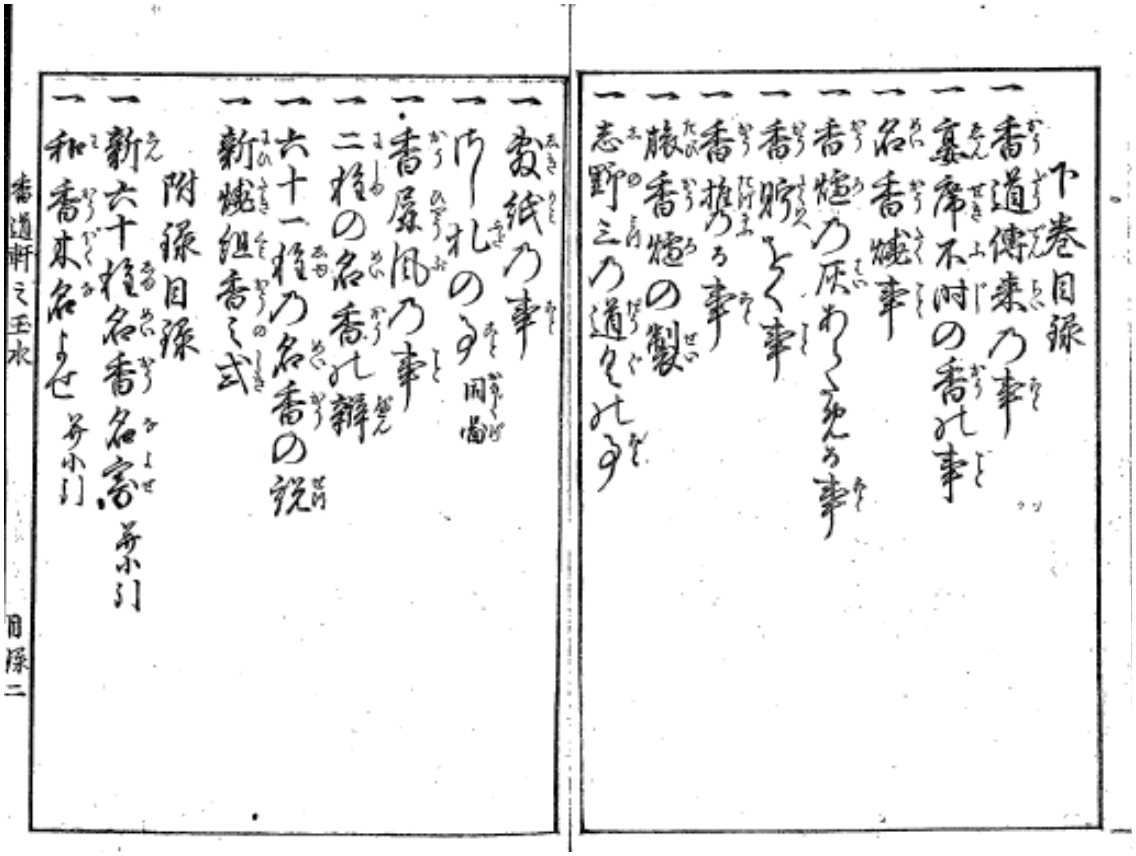
安楽窩中時（あんらくかちゅうのとき）
一炷（いっちゅう）
清心妙處有（せいしんみょうしょにあるを）
読知（よみてしる）

江釣隠 題（大枝流芳の別号）
押印

香道軒乃玉水

上巻目録

一 当流新形香火道具図式
一 新組香十品 並びに盤立物図式
花鳥香（かちょう）　蟷螂香（とうろう）
韻塞香（いんふたぎ）　緒手巻香（おだまき）
競渡香（けいと）　三径香（さんけい）
朝暮香（ちょうぼ）　三愛香（さんあい）
綱牽香（つなひき）　八陣香（はちじん）

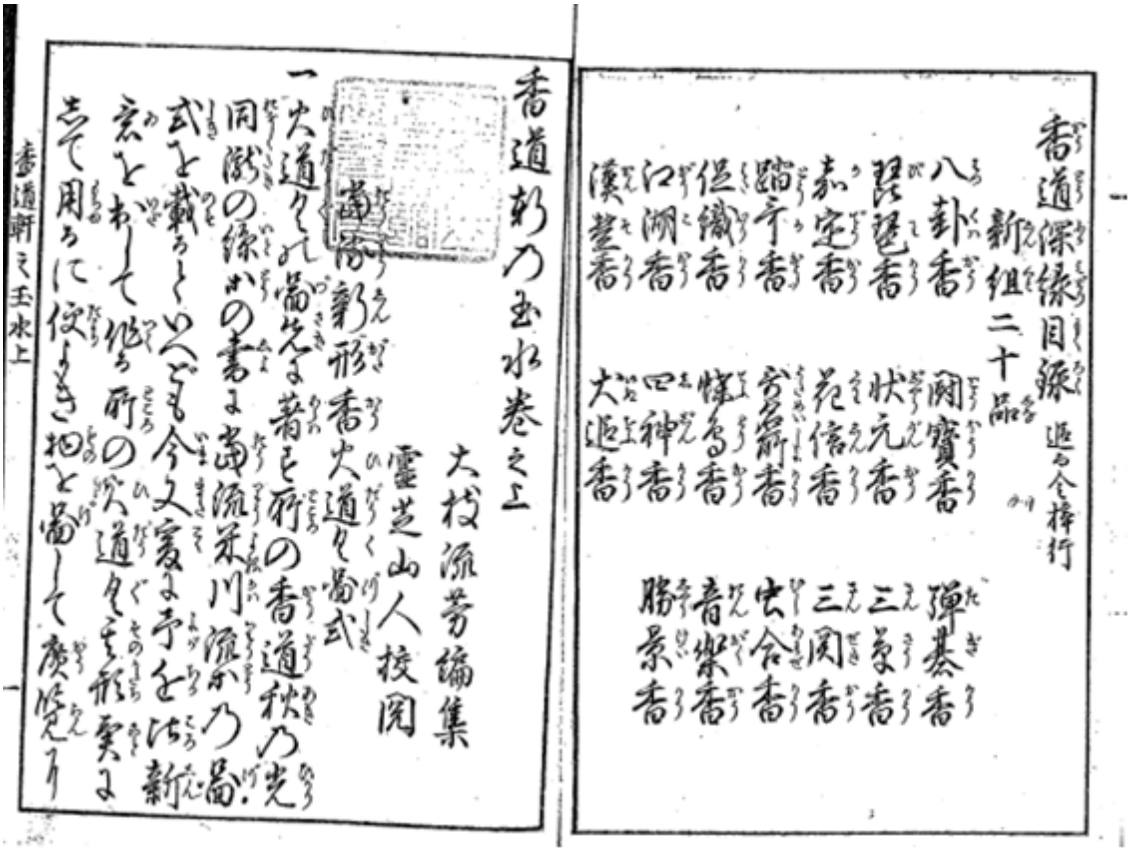


下巻目録

一香道傳来の事
一宴席不時の香の事
一名香焼く(たく)事
一香爐の灰あらためる事
一香貯えおく事
一香携(たずさ)うる事
一旅香爐の製(せい)
一志野三つの道具の事
一敷紙の事
一さし札の事 同じく図
一香屏風の事
一二種の名香の辨
一六十一種の名香の説
一新焼組香(にいたきぐみこう)の式

附録目録

一新六十種名香名寄 並びに小引
一和香木名よせ 並びに小引



香道深緑目録　追って全て梓行

新組二十品

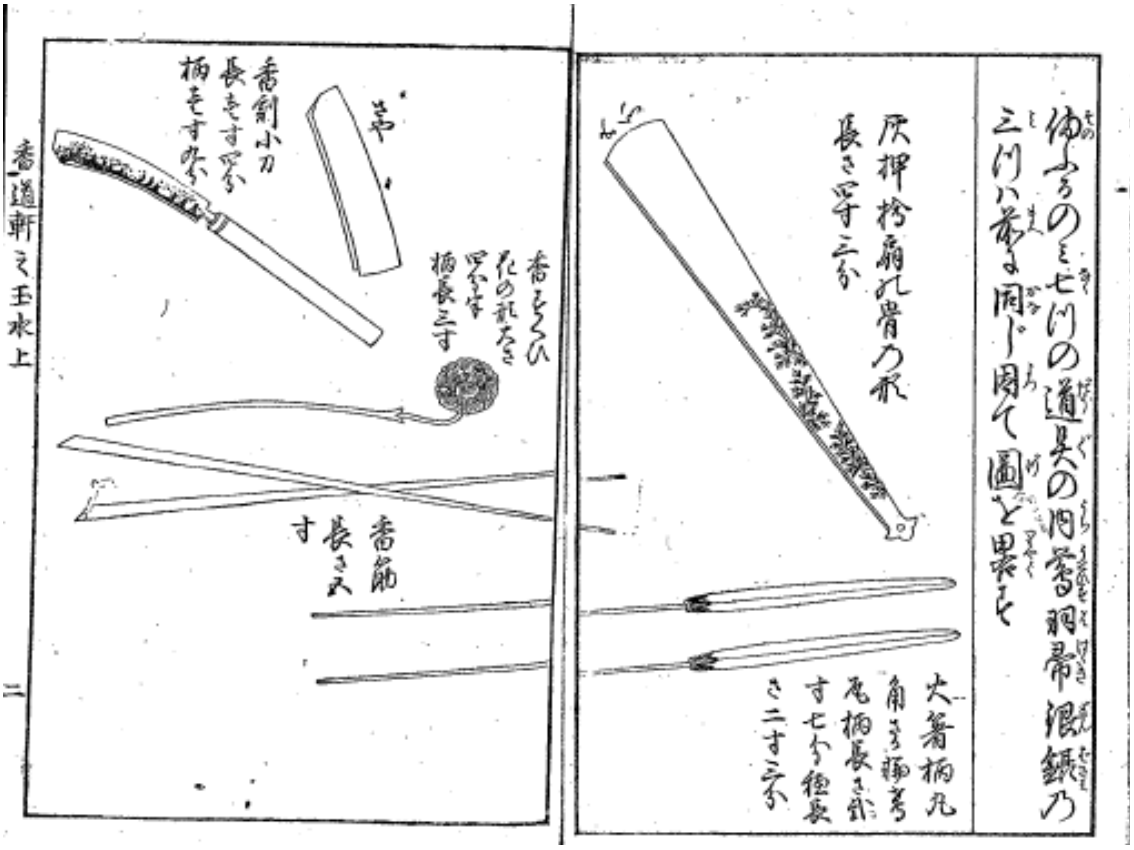
八卦香（はつか）　闘寶香（とうほう）　弾碁香（だんぎ）
琵琶香（びわ）　状元香（じょうげん）　三草香（さんそう）
嘉定香（かじょう）　花信香（かしん）　三関香（さんせき）
踏歌香（とうか）　歌名所香（うためいしょ）　虫合香（むしあわせ）
促織香（はたおり）　蝶鳥香（ちょうちょう）　音楽香（おんがく）
江湖香（ごうこ）　四神香（しじん）　勝景香（しょうけい）
漢楚香（かんそ）　犬追香（いぬおい）

香道軒乃玉水　巻之上

大枝流芳　編集
霊芝山人　校閲

当流新型火道具図式

一　火道具の図、先に著す所の『香道秋乃光』、同じく『瀧の絲』等の書に、当流、米川流等の図式を載するといえども、今またここに、予が近頃新意を出して作る所の火道具、その形、異にして用ゆるに便りよき物を図して、廣覧（こうらん）に



備うるのみ。七つの道具のうち、鶯、羽箒、銀鑷(鋏)の三つは前に同じ。因って図を略す。

灰押

檜扇の骨の形　長さ四寸三分

［図］

火箸

柄丸角さか(逆)輪(長柄の鐶)鳶尾(いちはつ)

柄長さ二寸七分　穂長さ二寸三分

［図］

香すくい

花の形大きさ　四分半　柄長さ三寸

［図］

香筯

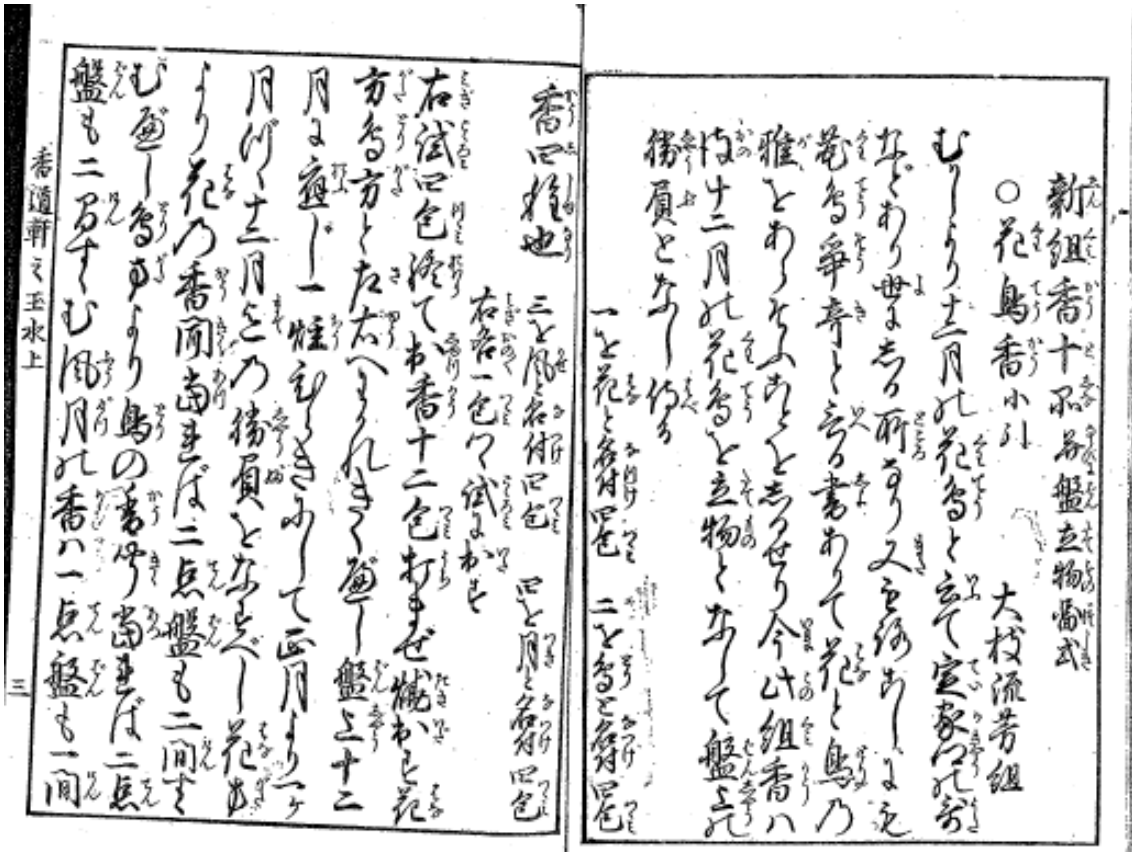
長さ五寸

［図］

香割小刀

長さ一寸四分　柄一寸九分

［図］



新組香十品並び盤立物図式

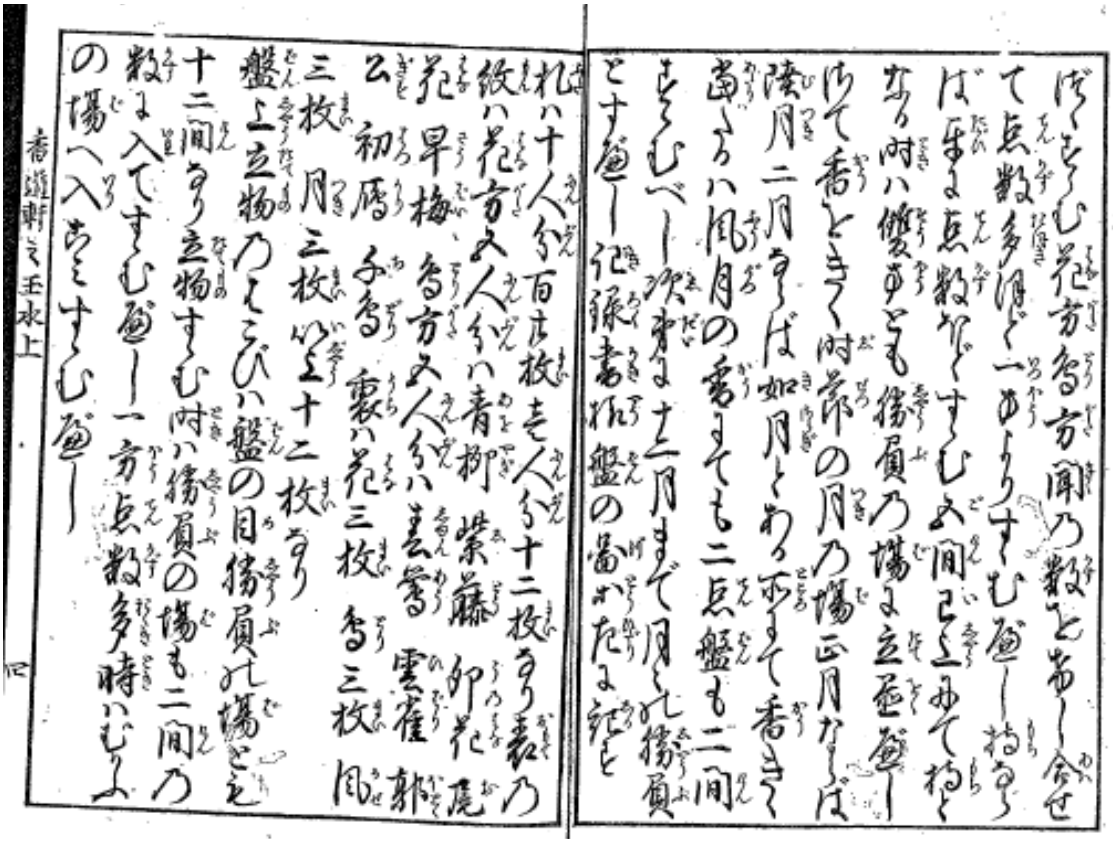
○花鳥香　小引　　大枝流芳組

むかしより十二月の花鳥と云うて、定家卿の歌などあり。世にしる所なり。またもろこし(唐)にも『花鳥争竒』と云える書ありて、花と鳥の雅をあらそうことをしるせり。今、この組香は、かの十二月の花鳥を立物となして、盤上の勝負となし侍る。

香四種也

一を「花」と名付け　四包　二を「鳥」と名付け　四包
三を「風」と名付け　四包　四を「月」と名付け　四包
右各一包ずつ試みに出す。

右試み四包終りて、出香十二包打ちまぜ焼き出す。「花方」、「鳥方」と左右へわかれきくべし。盤上十二月に応じ、「一炷びらき」にして、正月より一ヶ月ずつ十二月迄の勝負をなすべし。「花方」より「花」の香聞き当てれば二点、盤も二間すすむべし。「鳥方」より「鳥」の香聞き当てれば二点、盤も二間すすむ。「風」「月」の香は一点、盤も一間

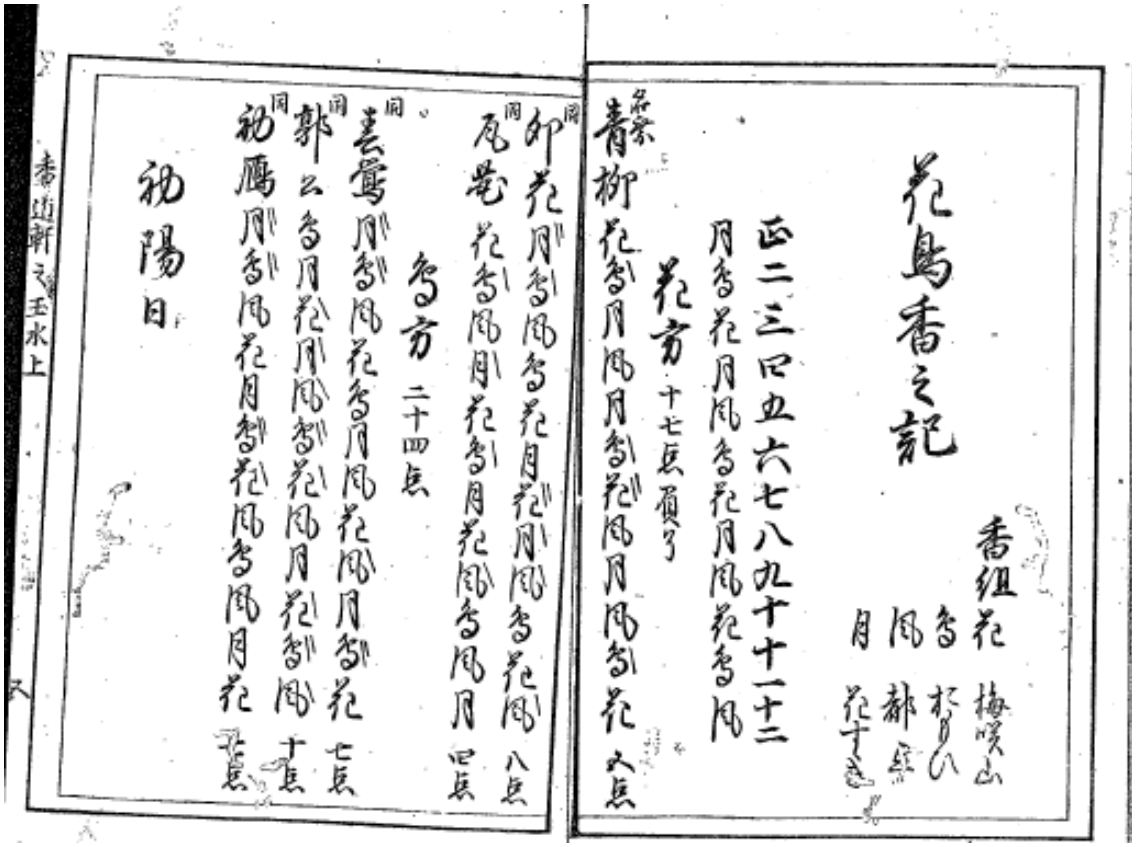


ずつすすむ。「花方」、「鳥方」聞きの数をけし合わせて点数多きほど一方よりすすむべし。「持」(引き分け)ならば互いに点数ほどすすむ。五間以上にて「持」となるときは、雙(双)方とも「勝負の場」に立て置くべし。

さて、香を聞く時節の月の場、正月ならば「睦月」、二月ならば「如月」とある所にて香ききき当たるは、「風」「月」の香にても二点、盤も二間すすむべし。次第に十二月まで月々の勝負とすべし。記録書き様、盤の図等、左に記す。

札は、十人分百二十枚、一人分十二枚なり。表の紋は、「花方」五人分は「青柳(あおやぎ)」、「紫藤(しどう)」、「卯花(うのはな)」、「尾花(おばな)」、「早梅(そうばい)」。「鳥方」五人分は「春鶯(しゅんのう)」、「雲雀(ひばり)」、「郭公(ほととぎす)」、「初雁(はつかり)」、「千鳥(ちどり)」。裏は、「花」三枚、「鳥」三枚、「風」三枚、「月」三枚、以上十二枚なり。

盤上立物のはこびは、盤の目、「勝負の場」とも十二間なり。立物すすむ時は、「勝負の場」も二間の数に入れてすすむべし。一方、点数の多き時は、むこうの場へ入りこみすすむべし。



花鳥香之記

香組花 梅咲山 香 かりの 風 赫奕 月 花十

正二三四五六七八九十十一十二

月香花月風香花月風花香風

花方 十七点 頁了

青柳 花香月風月香花風月風香花 六点

同 卯花 月香風香花月花月風香花風 八点

同 瓦巻 花香風月花香月花風香風月 四点

香方 二十四点

同 芸薹 月香風花香月風花風月香花 七点

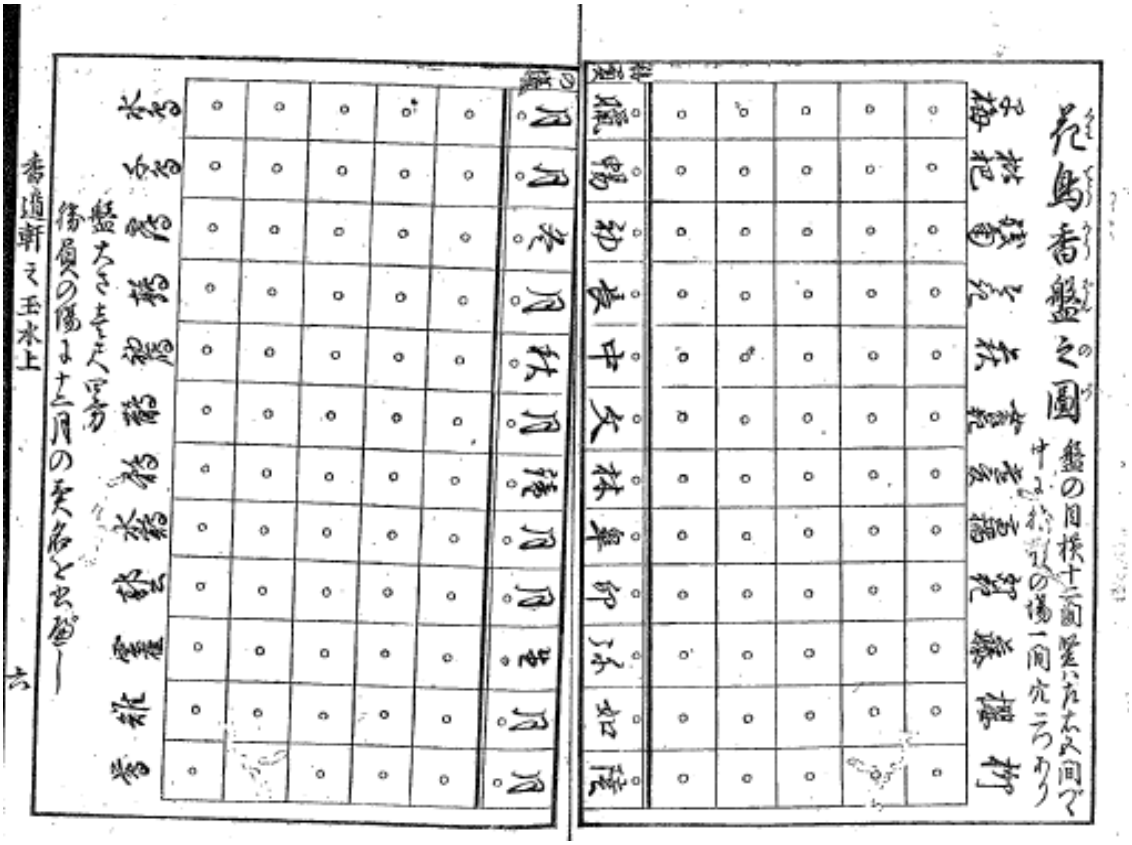
同 郭公 香月花月風香花風月花香風 十点

同 初鷹 月香風花月香花風香風月花 十点

初陽日

香道新之玉水上

[花鳥香之記]



［花鳥香盤の図］

盤の目十二間、竪は左右五間ずつ
中に勝負の場一間、穴二つあり。

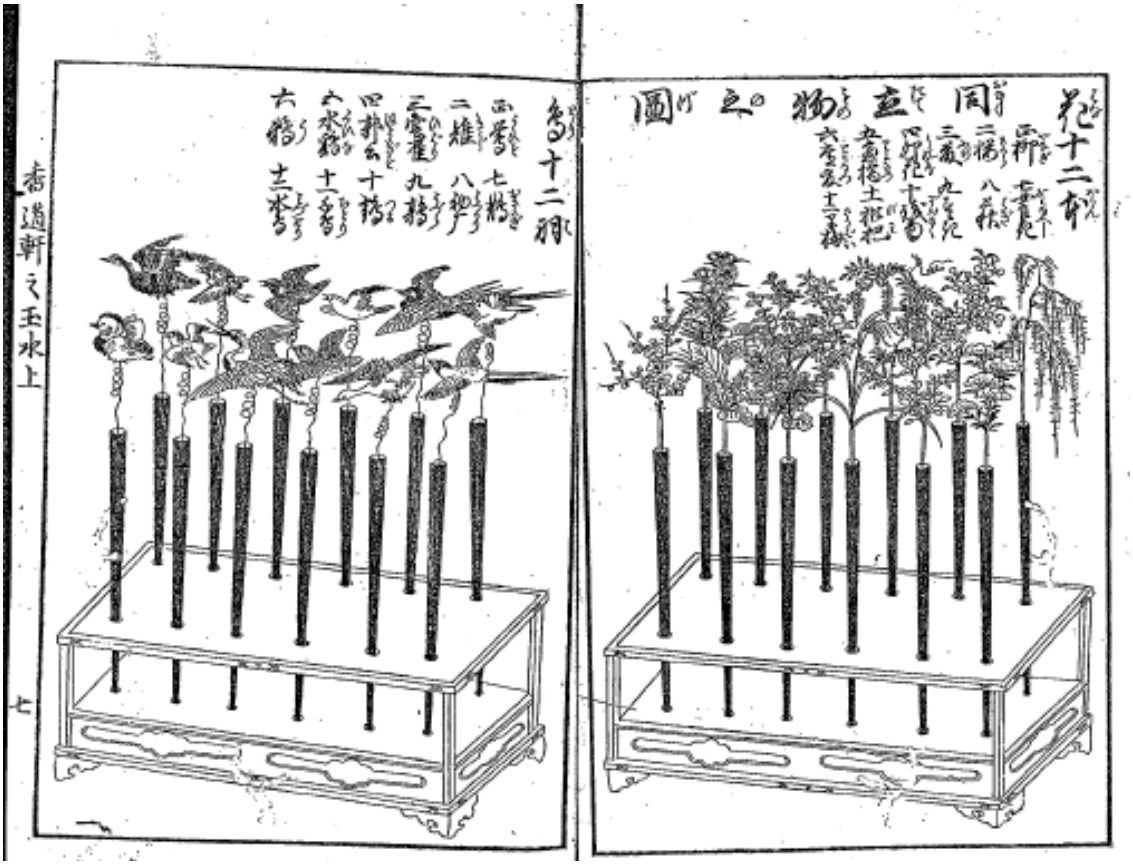
梅
杷
菊
すき
花
早
枇
残
す
萩
女
郎
夏
橘
花
常
盧
卯
藤
桜
柳

勝負の場

臘月
暢月
初冬
長月
中秋
文月
林鐘
皐月
卯月
弥生
如月
睦月

鳥
鳥
水
千
鶴
鶉
初
鵲
鵜
水
郭
雲
雉
鶯
鶏
公
雀

盤大きさ一尺四方
勝負の場に十二月の異名を書くべし。



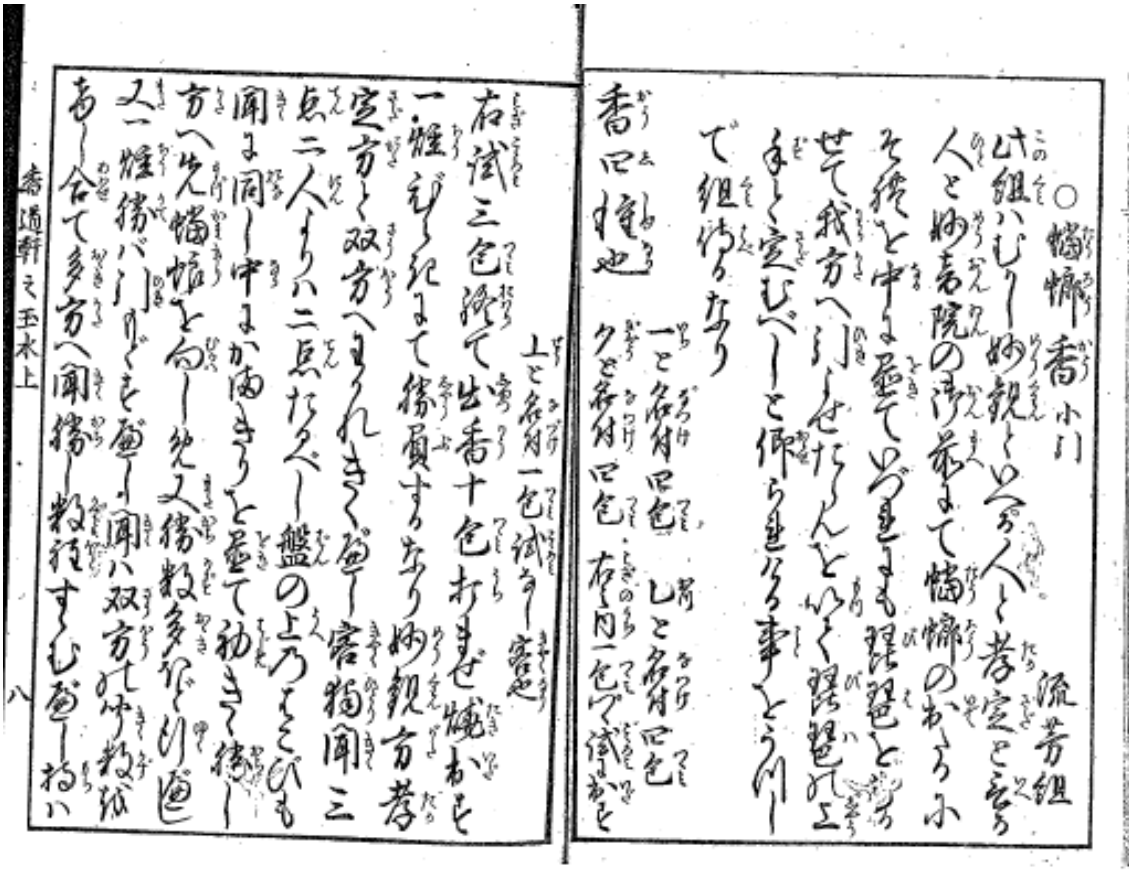
［同じく立物の図］

［花］十二本

正 柳　七 女郎花
二 桜　八 萩
三 藤　九 すすき
四 卯花　十 残菊
五 盧橘（りょきつ）　十一 枇杷
六 常夏　十二 早梅

［鳥］十二本

正 鶯　七 鵲（かささぎ）
二 雉　八 初雁
三 雲雀　九 鶉（うずら）
四 郭公　十 鶴
五 水鶏（くいな）　十一 千鳥
六 鵜　十二 水鳥



○蟷螂香（とうろうこう）小引　流芳組

この組香は、むかし「妙観」といえる人と「孝定」と云える人と「妙音院」の御前にて蟷螂の出たるに、それを中に置きていずれもにも琵琶を弾かせて我が方へ引きよせたらんを以って琵琶の上手と定むべしと仰せられける事をうつして組み侍るなり。

香四種也

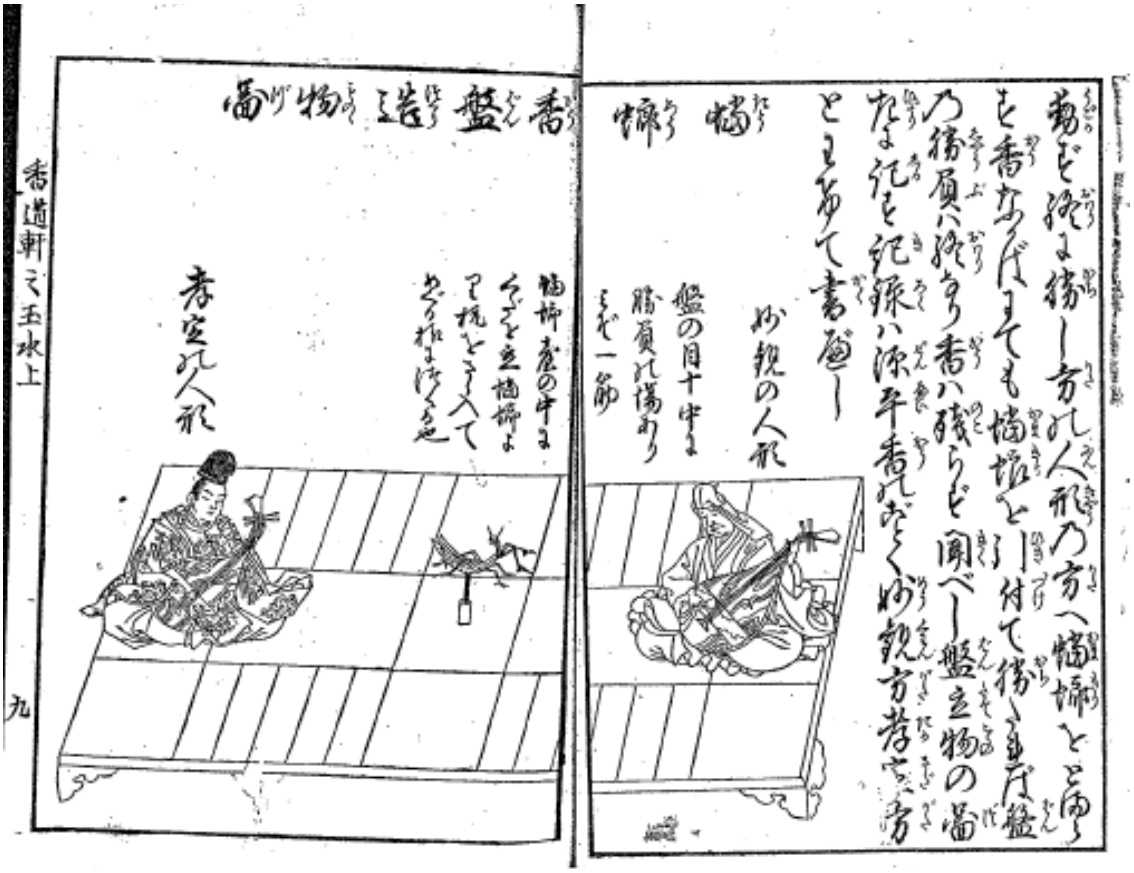
「一」（いち）と名付け　四包　「乙」（おつ）と名付け　四包

「ク」（ぎょう）と名付け　四包　右の内一包ずつ試みに出す。

「丄」（じょう）と名付け　一包　試みなし。「客」なり。

右試み三包終りて、出香十包打ちまぜ焼き出す。

「一炷びらき」にて勝負するなり。「妙観方（みょうかんがた）」「孝定方（たかさだがた）」と双方へわかれきくべし。「客」、独聞三点、二人よりは二点たるべし。盤の上のはこびも聞きに同じ。中に「かまきり」を置きて初めきき勝ちし方へ、先ず「蟷螂」を向わせしめ、また、勝ち数多きほど行くべし。また、一炷勝てば引きもどすべし。聞きは双方の聞き数をけし合わせて、多き方へ聞き勝ちし数程すすむべし。「持」は、



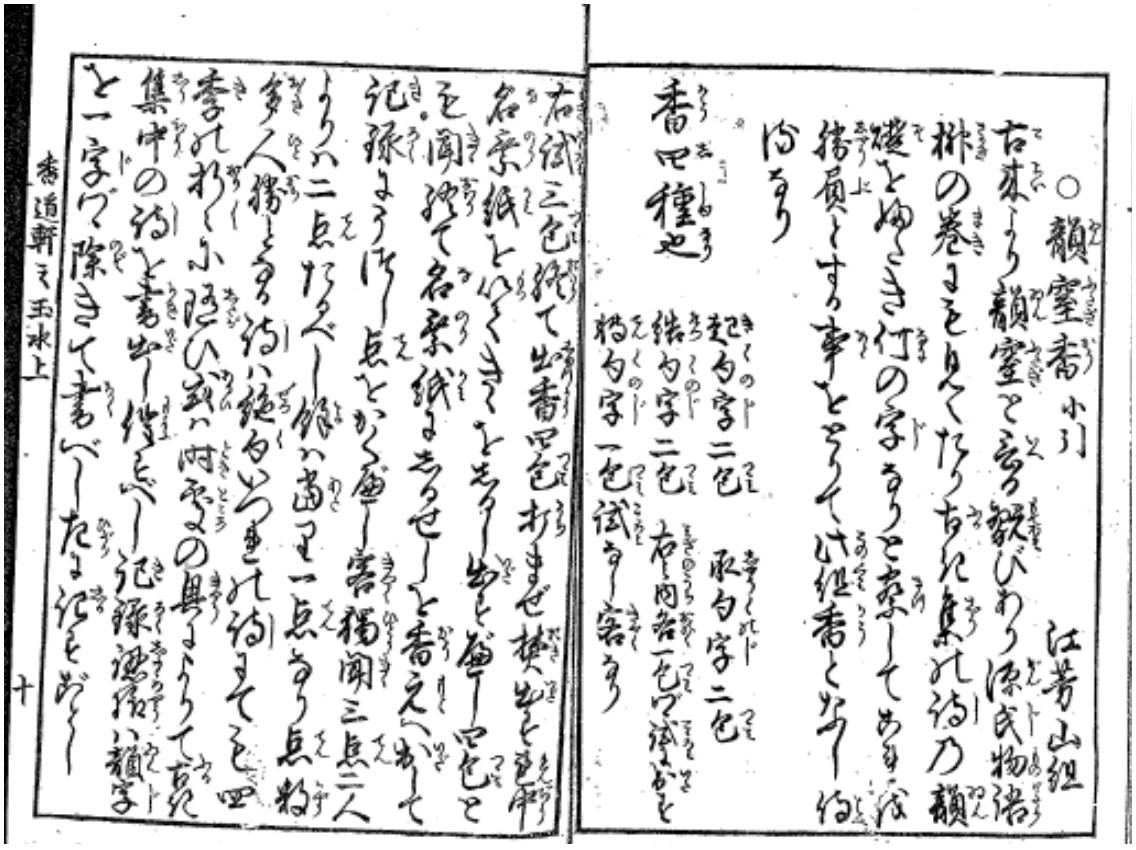
動かず、終わりに勝ちし方の人形の方へ「蟷螂」をとまらす。香なかばにても「蟷螂」を引き付けて勝ちたれば、「盤の勝負」は終りなり。香は残らず聞くべし。盤立物の図、左に記す。記録は「源平香」のごとく「妙観方」、「孝定方」とわけて書くべし。

[蟷螂香盤造物の図]

「妙観」の人形

盤の目十、中に
「勝負の場」あり。
みぞ一筋。
蟷螂台の中に
くだ(管)を立て、蟷螂より杭をさし入れて
めぐる様につくるなり。

「孝定」の人形



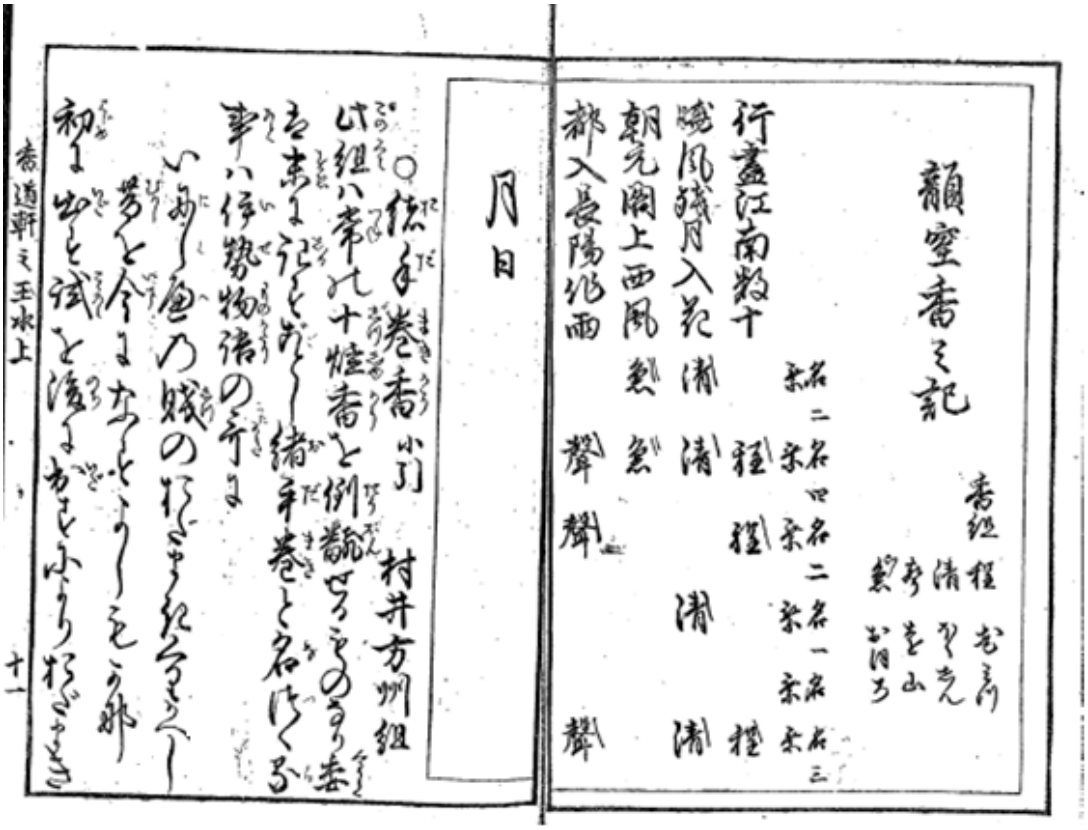
○韻窒香（いんふたぎこう）小引　江芳山組

古来より、韻窒と云える翫びあり。『源氏物語』「榊の巻」にも見えたり。古き集の詩の韻礎をふたぎ、何の字なりと察して、これを勝負とする事をとりて、この組香となし侍るなり。

香四種也

起句の字　二包　承句の字　二包
結句の字　二包　右の内各一包ずつ試みに出す。
転句の字　一包　試みなし。「客」なり。

右試み三包終りて、出香四包打ちまぜ焚き出す。連中、名乗紙を以ってききをしるし出すべし。四包とも聞き終わりて名乗紙にしるせしを香元へ出して記録にうつし、点をかくべし。「客」、独聞三点、二人よりは二点たるべし。餘は当たり一点なり。点数多き人「勝」となる。詩は、絶句いずれの詩にても四季の折々に隨い、或いは時處（ときところ）の興によりて古き集中の詩を書き出し催すべし。記録認め様は韻字と一字ずつ除きて書くべし。左に記すごとし。



［韻窒香之記］

詩

行尽江南数十程（行き尽くす　江南数十程）
暁風残月入華清（暁風　残月　華清に入る）
朝元閣上西風急（朝元閣上　西風急なり）
都入長陽作雨声（都て長陽入りて　雨声を作す）

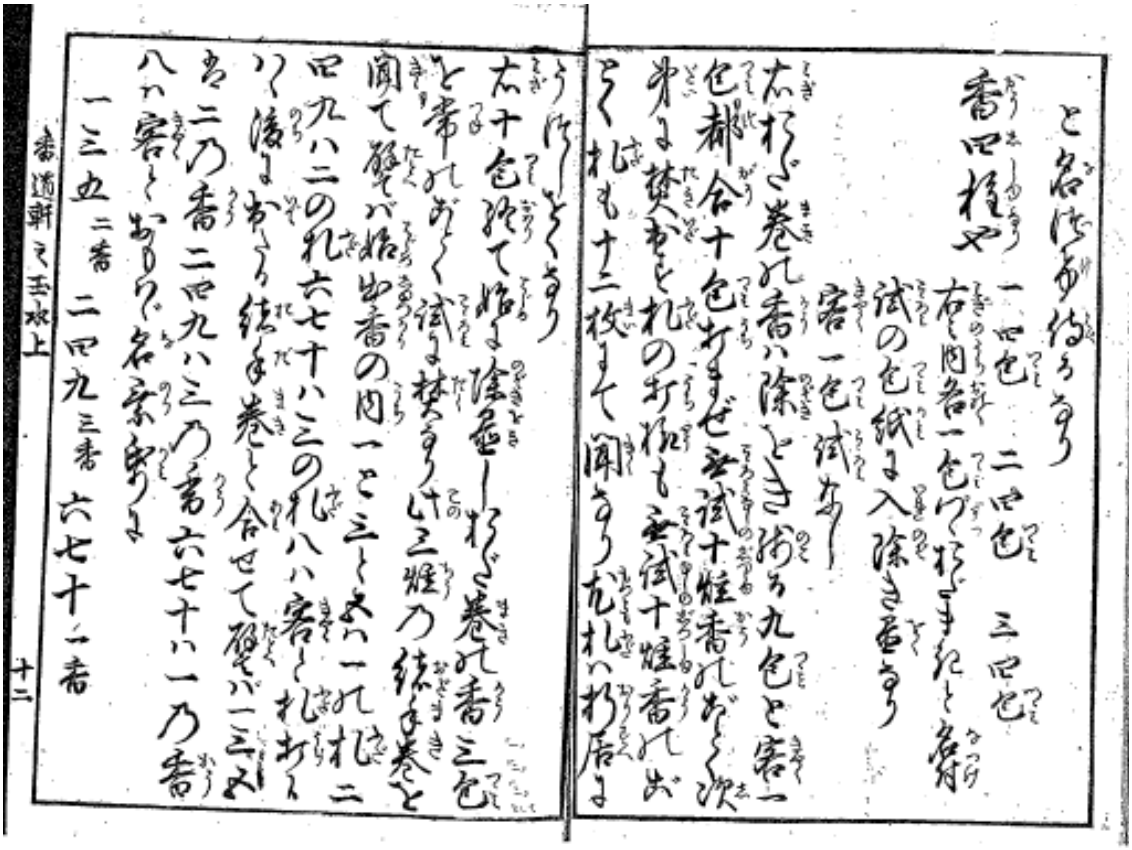
○緒手巻香（おだまきこう）小引　村井方州組

この組は、常の十炷香を倒翻（とうほん）せるものなり。委しくは末に記すごとし。緒手巻と名づくる事は『伊勢物語』の歌に

いにしへの賤（しず）のおだまきくりかえし
昔を今になすよしもがな

※『伊勢物語』三十二段

初めに出す試みを後に出すにより、「おだまき」



と名づけ侍るなり。

香四種也

「一」四包　「二」四包　「三」四包

右の内各一包ずつ「おだまき」と名付け

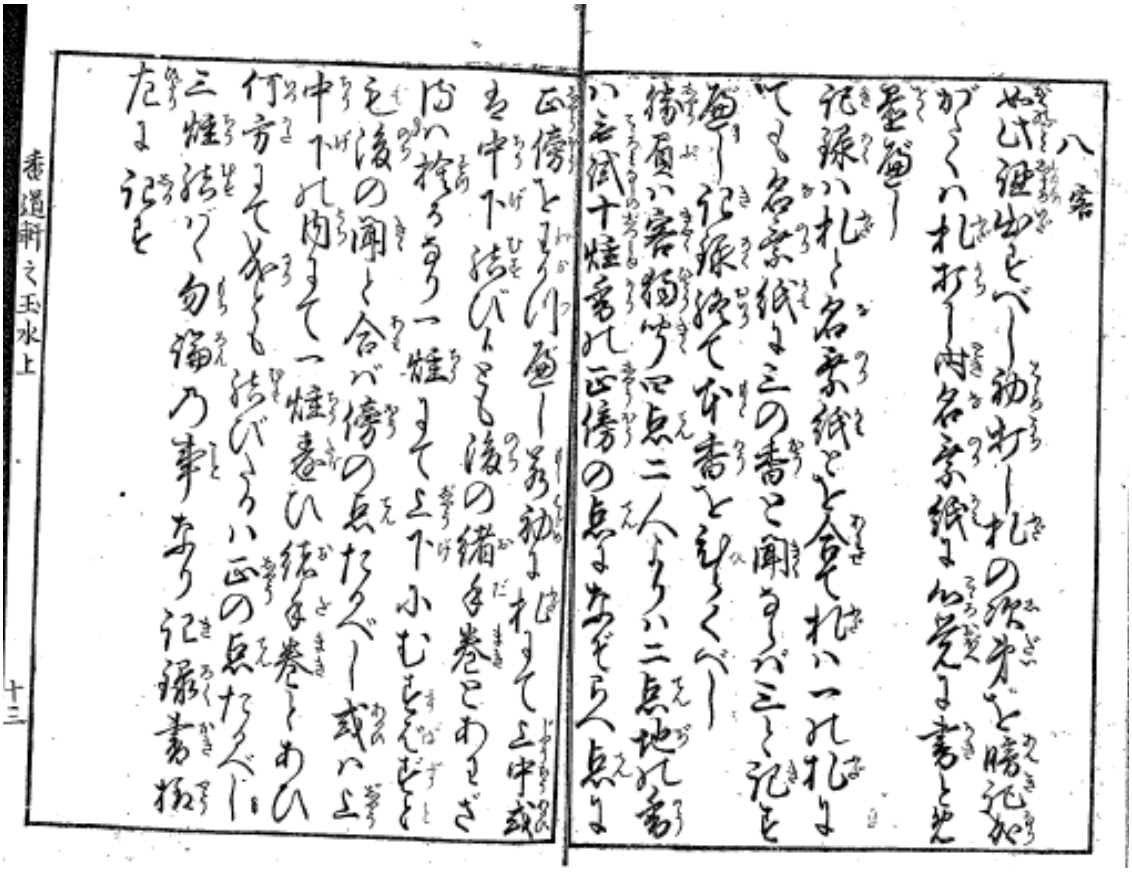
試みの包紙に入れ、除き置くなり。

「客」一包　試みなし。

右「おだまき」の香は除きおき、残る九包と「客」一包、都合十包打ちまぜ、「無試十炷香」のごとく次第に焚き出す。札の打ち様も「無試十炷香」のごとく、札も十二枚にて聞くなり。尤も札は折居にうつし置くなり。

右十包終りて、始めに除き置きし「おだ巻」の香三包を常のごとく試みに焚くなり。この三炷の「緒手巻」を聞きて、譬えば、始め出香の内、一と三と五は「一」の札、二・四・九は「二」の札、六・七・十は「三」の札、八は「客」と札打ち候わば、後に出たる「緒手巻」と合わせて、譬えば一・三・五は「二」の香、二・四・九は「三」の香、六・七・十は「一」の香、八は「客」とおもえば名乗紙に

「一三五　二番、二四九　三番、六七十　一番、

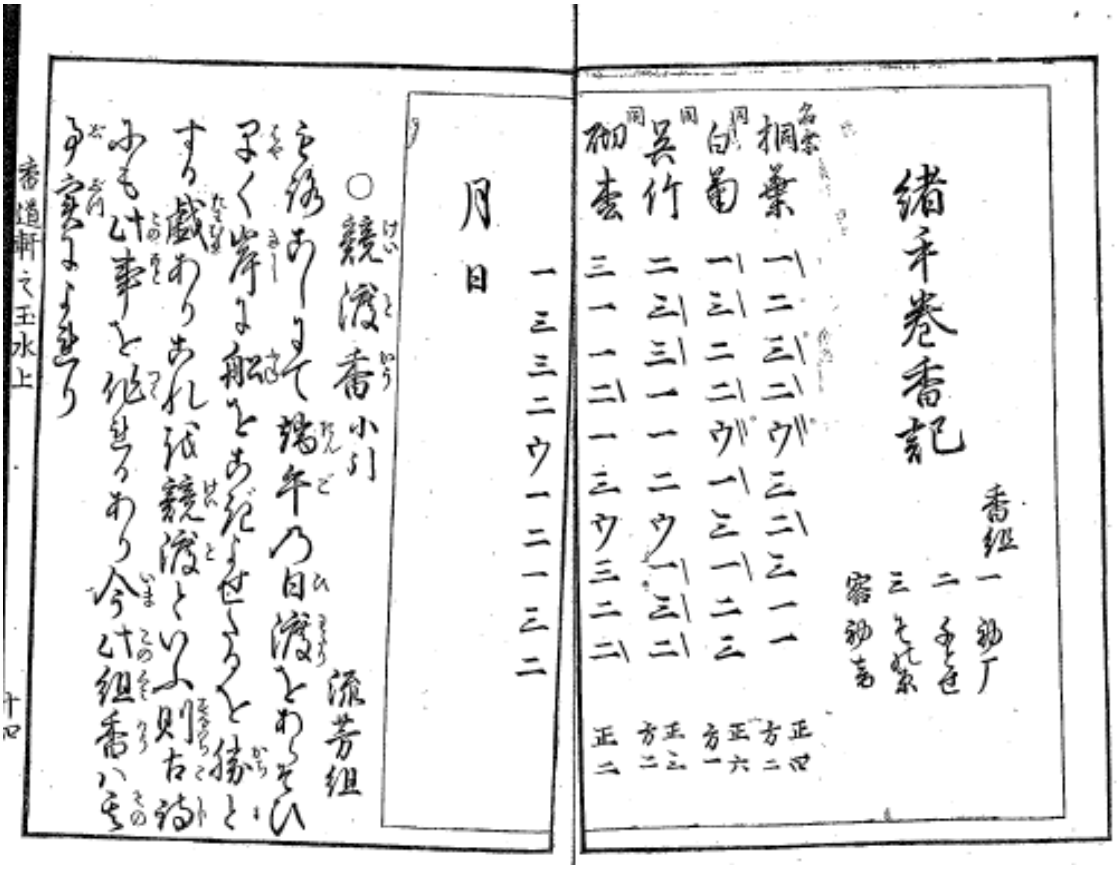


八　客」

かくのごとく認め出すべし。初め打ちし札の次第を暗記なりがたくば、札打ちし時、名乗紙に心覚えに書きとめ置くべし。

記録は札と名乗紙とを合わせて、札は「一」の札にても、名乗紙に「三」の香と聞くならば「三」と記すべし。記録終りて本香をひらくべし。

勝負は、「客」、独聞四点、二人よりは二点、地(ぢ)の香は「無試十炷香」の「正傍の点」になぞらえ、点に正傍をわかつべし。もし、初めに札にて上・中或いは中・下結び候とも、後の「緒手巻」とあわざるは捨(すつ)るなり。一炷にて上・下にむすばずとも、後の聞きと合わば「傍の点」たるべし。或いは、上・中・下の内にて一炷違い、「緒手巻」とあい何方にて成りとも結びたるは「正の点」たるべし。三炷結ばば、勿論の事なり。記録書き様、左に記す。



緒手巻香記

香組 一 沙丁
二 手とき
三 そもそ
客 沙壽

名木 桐葉 一 二 三 ウ 三 二 三 一 一 正四 方二
同 白菊 一 三 二 二 ウ 一 三 一 二 三 正六 方一
同 呉竹 二 三 三 一 一 二 ウ 一 三 二 正三 方二
同 柳 玄 三 一 一 二 一 三 ウ 三 二 二 正二

一 三 三 二 ウ 一 二 一 三 二

月 日

○競渡香 小引 流芳組

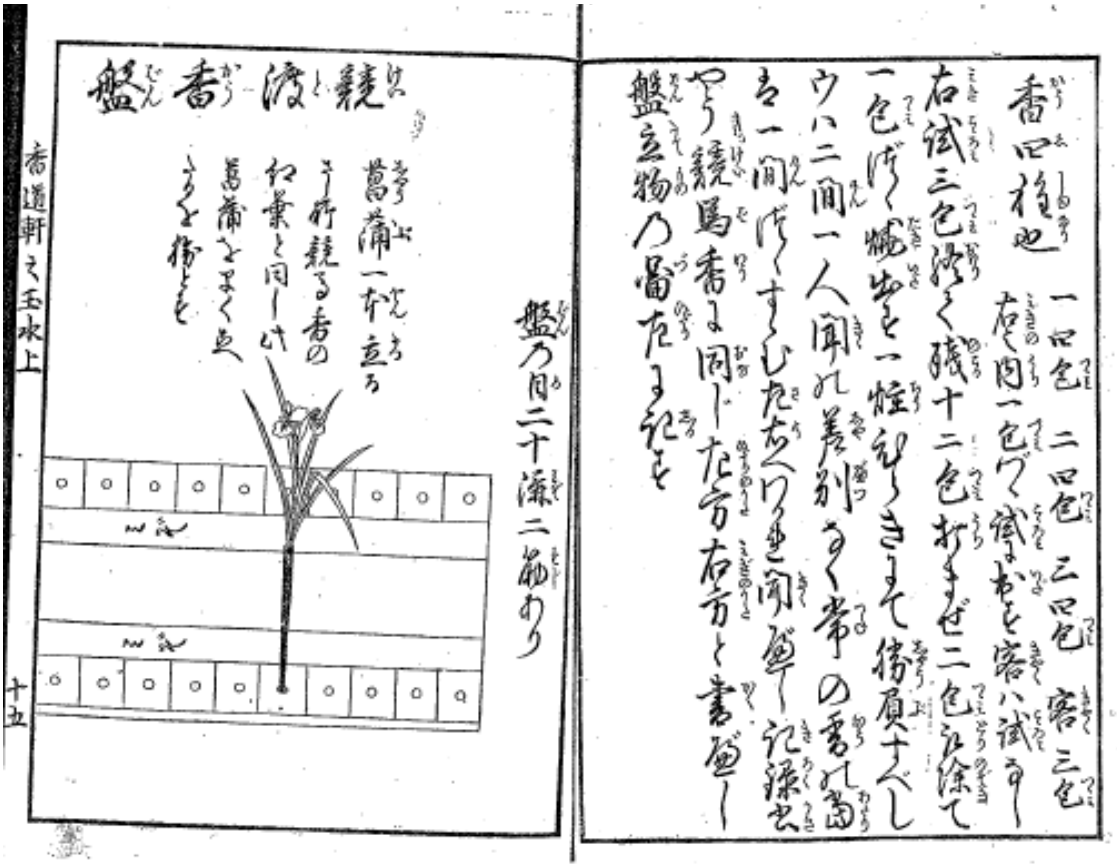
もろこしにて端午の日渡りをあらそい、早く岸に船をこぎよせたるを勝ちとする戯れあり。これを「競渡」という。則ち、古詩にもこの事を作れるあり。今、この組香は、その事実によれり。

香道軒之玉水上 十四

［緒手巻香記］

○競渡香（けいとこう）小引　流芳組

もろこし（唐）にて、端午の日渡りをあらそい、早く岸に船をこぎよせたるを勝ちとする戯れあり。これを「競渡」という。則ち、古詩にもこの事を作れるあり。今、この組香は、その事実によれり。



香四種也

「一」四包 「二」四包 「三」四包「客」三包

右の内一包ずつ試みに出す。「客」は試みなし。

右試み三包終りて、残る十二包打ちまぜ、二包取り除きて、一包ずつ焚き出す。一炷ひらきにて勝負すべし。

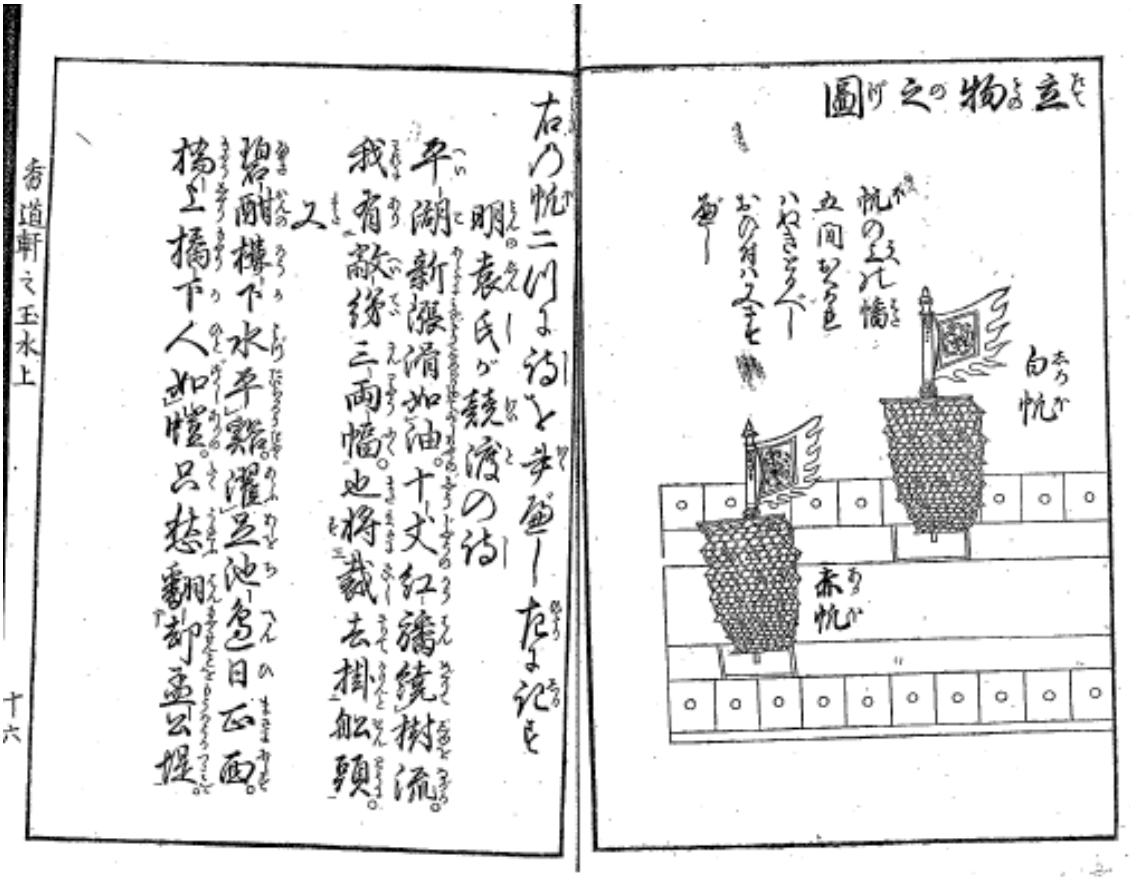
「ウ」は二間、一人聞きの差別なく、「常の香」の当たりは一間ずつすすむ。左右へわかれ聞くべし。記録書きよう、「競馬香」に同じ。「左方」、「右方」と書くべし。盤立物の図、左に記す。

[競渡香盤立物の図]

盤の目二十、溝二筋あり。

「菖蒲」一本立つる。

さし所「競馬香」の紅葉と同じ。この「菖蒲」を早くこえ(越)たるを「勝」とす。



［立物の図（前項のつづき）］

「白帆」

「赤帆」

帆の上の幡（はた）、五間おくる（遅）れば、ぬきとるべし。おい（追）付けば、またさ（刺）すべし。

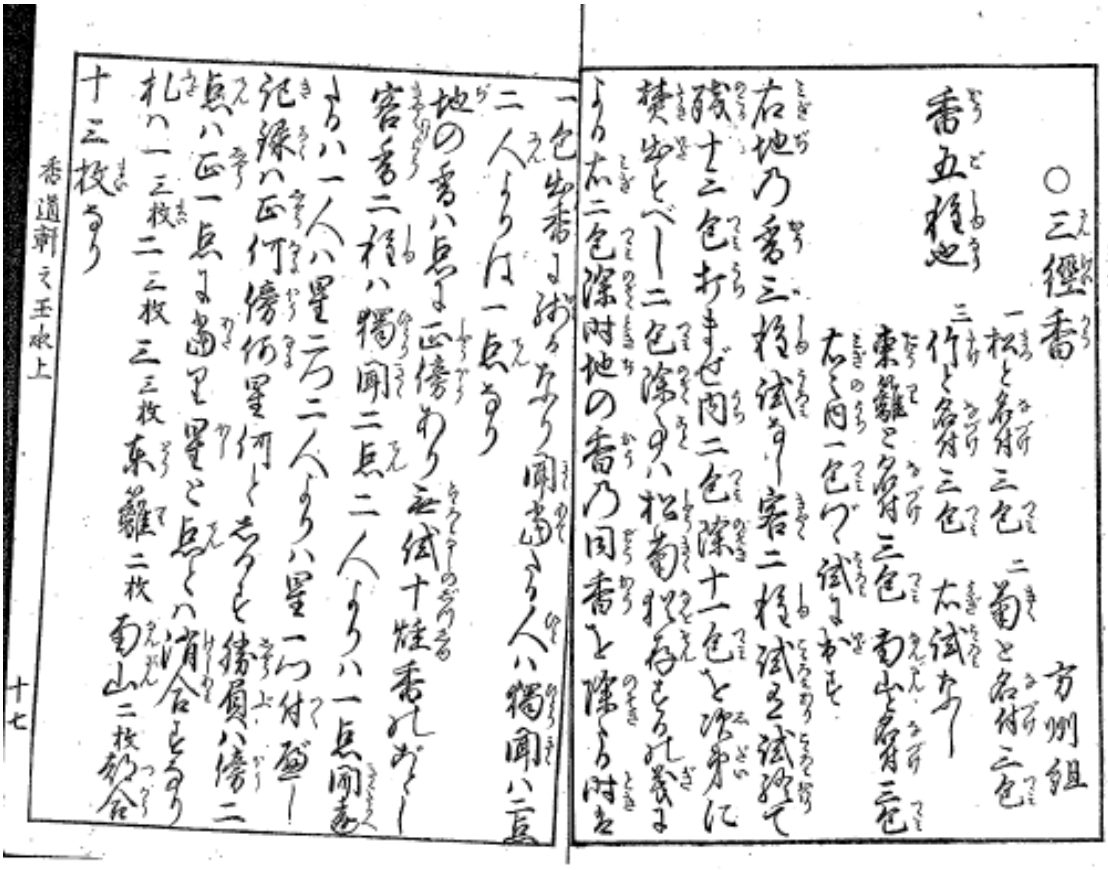
右の帆二つに詩を書くべし。左に記す。

明の袁氏（えんし）が競渡の詩

平湖新漲滑如油（いこあらたにみなぎりてなめらかにしてあぶらのごとし）
十丈紅旛繞樹流（じゅうじょうのこうはんじゅをめぐりてながる）
我有敝綈三両幅（われにへいていさんりょうふくあり）
也将裁去掛船頭（またまさにさいしさりてせんどうにかけんとす）

又

碧酣樓下水平谿（へきかんのろうかみずたにたいらかなり）
濯足池辺日正西（あしをあらうちへんひまさにしす）
橋上橋下人如蟹（きょうじょうきょうかひとありのごとし）
只愁翻却孟公堤（ただうれうもうこうがつつみをはんきゃくせんことを）



○三徑香（さんけいこう）　方州組

香五種也

一「松」と名付け　三包　二「菊」と名付け　三包

三「竹」と名付け　三包　右試みなし。→「地の香」

「東籬」（とうり）と名付け　三包

「南山」と名付け　三包

右の内一包ずつ試みに出す。→「客香」

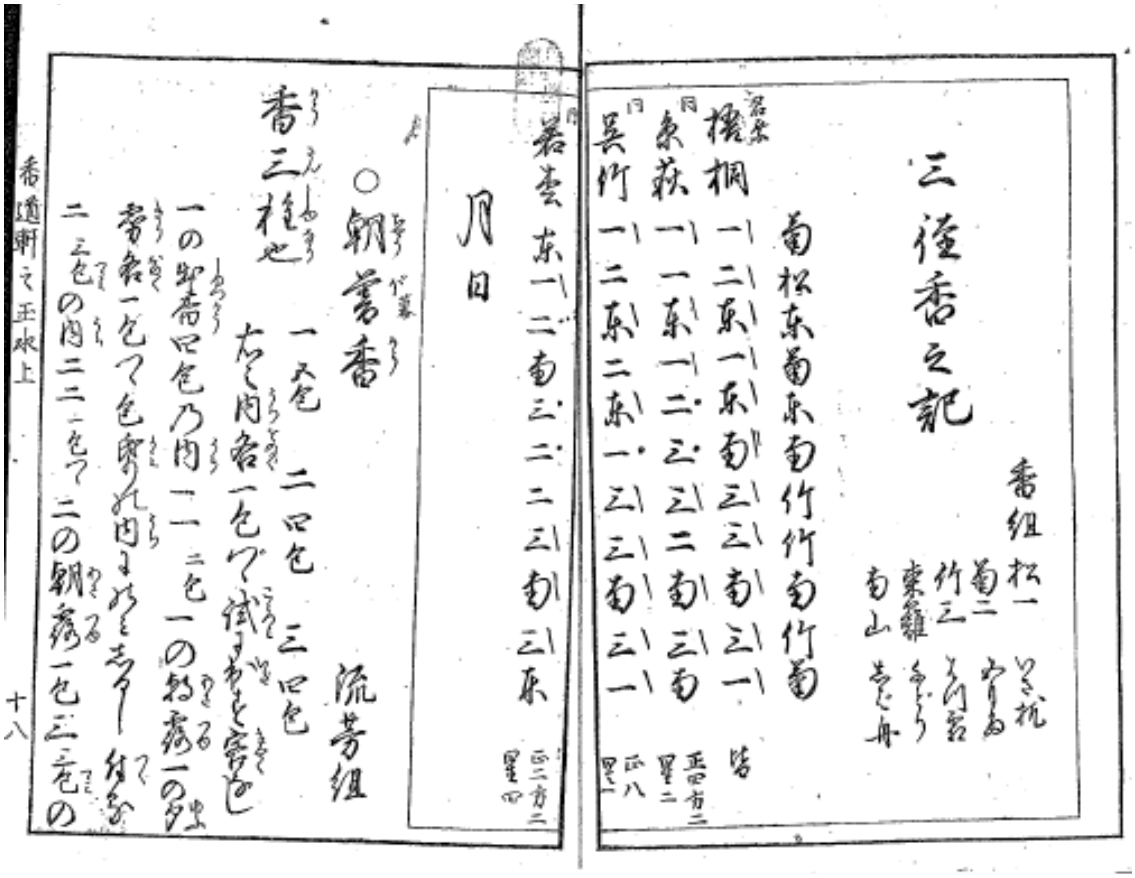
右「地の香」三種試みなし。「客」二種試み有り。試み終りて、残り十三包打ちまぜ、内二包除き、十一包を次第に焚き出すべし。二包除く事は「松菊猶存する」の義による。右二包除く時、「地の香」の同香を除きたる時は一包出香に残るなり。聞き当てたる人は、独聞は二点、二人よりは一点なり。

「地の香」は、点に正傍あり。「無試十炷香」のごとし。

「客香」二種は独聞二点、二人よりは一点。聞き違えたるは一人は星二つ、二人よりは星一つ付くべし。

記録は「正何」「傍何」「星何」としるす。勝負は傍二点は正一点に当たり、星と点は消し合わすなり。

札は、「一」三枚、「二」三枚、「三」三枚、「東籬」二枚、「南山」二枚、都合十三枚なり。



三徑香之記

香組

○朝暮香（ちようぼこう）　流芳組

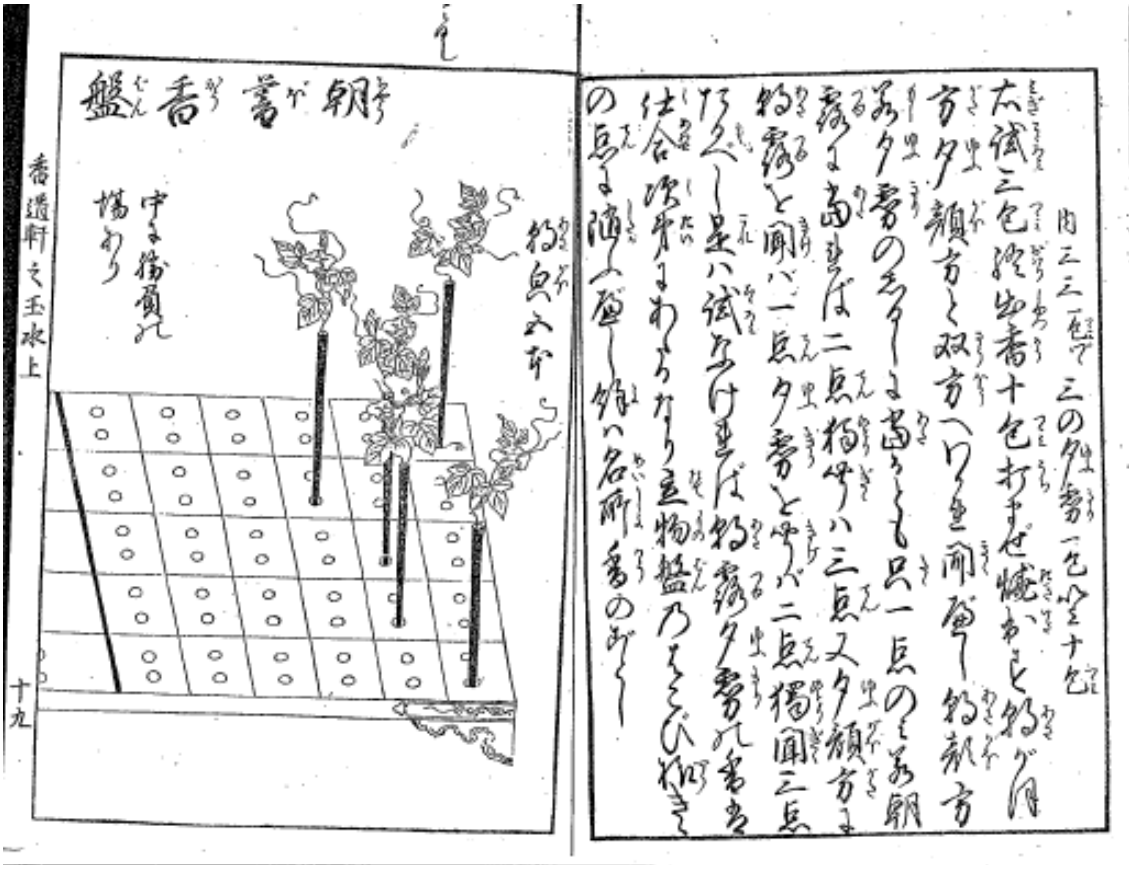
香三種也

「一」五包　「二」四包　「三」四包

右の内各一包ずつ試みに出す。客なし。

「一」の出香四包の内、「一、一」二包、「一の朝露」「一の夕霧」、各々一包ずつ包紙の内にのみしるし付くる。

「二」三包の内、「二、二」一包ずつ、「二の朝露」一包、「三」三包の



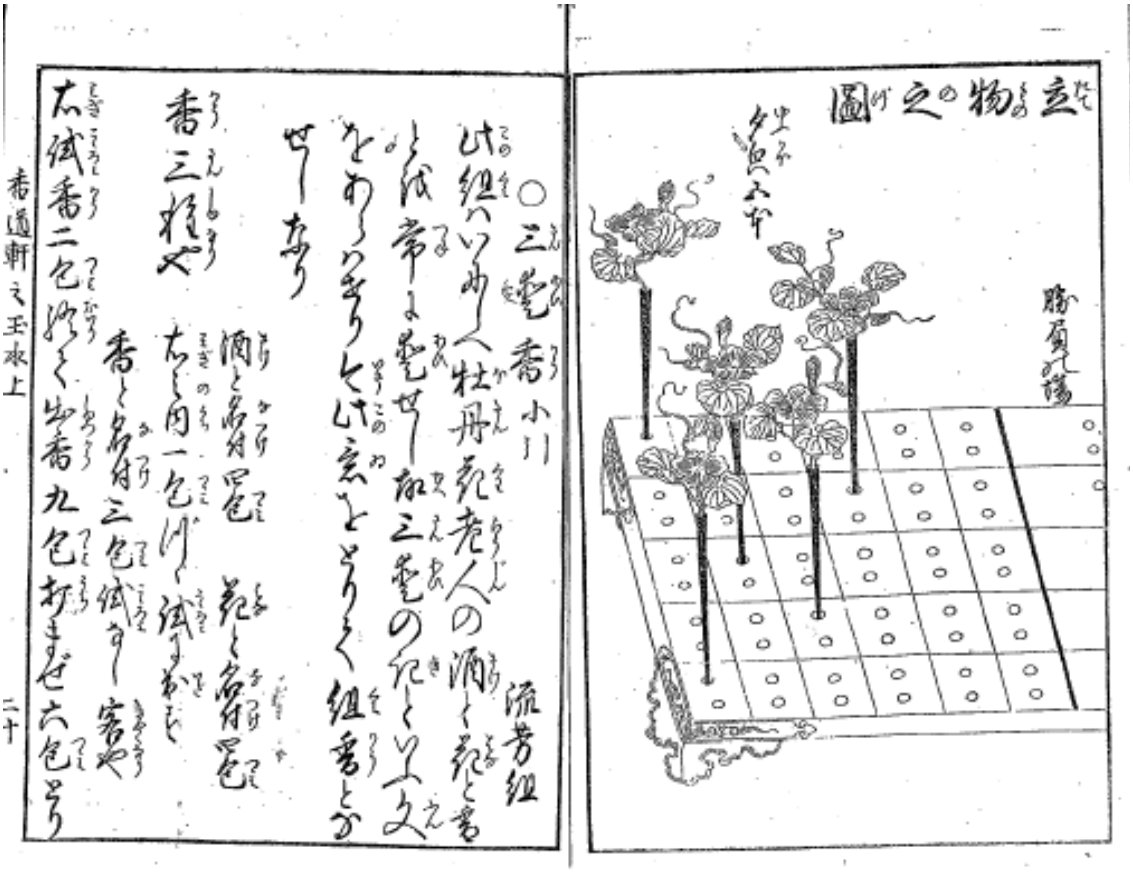
内、「三、三」一包ずつ、「三の夕霧」一包　以上十包

右試み三包終り、出香十包打ちまぜ焚き出す。「朝がお方」「夕顔方」と双方へわかれ聞くべし。「朝顔方」もし「夕霧」のしるしに当るともただ一点のみ。もし「朝露」に当れば二点、独聞は三点。また「夕顔方」に「朝露」を聞けば一点、「夕霧」を聞けば二点、独聞三点たるべし。これは試みなければ、「朝露」、「夕霧」の香は仕合せ次第にあたるなり。立物、盤のはこび様聞きの点に随うべし。餘は「名所香」のごとし。

［朝暮香盤立物の図］

「朝顔」五本

中に「勝負の場」あり。



勝負の場

「夕顔」五本

○三愛香（さんあいこう）小引　流芳組

この組は、いにしえ「牡丹花老人」の酒と花と香とを常に愛せし故、「三愛の記」という文をあらわせり。今、この意をとりて組香となせしなり。

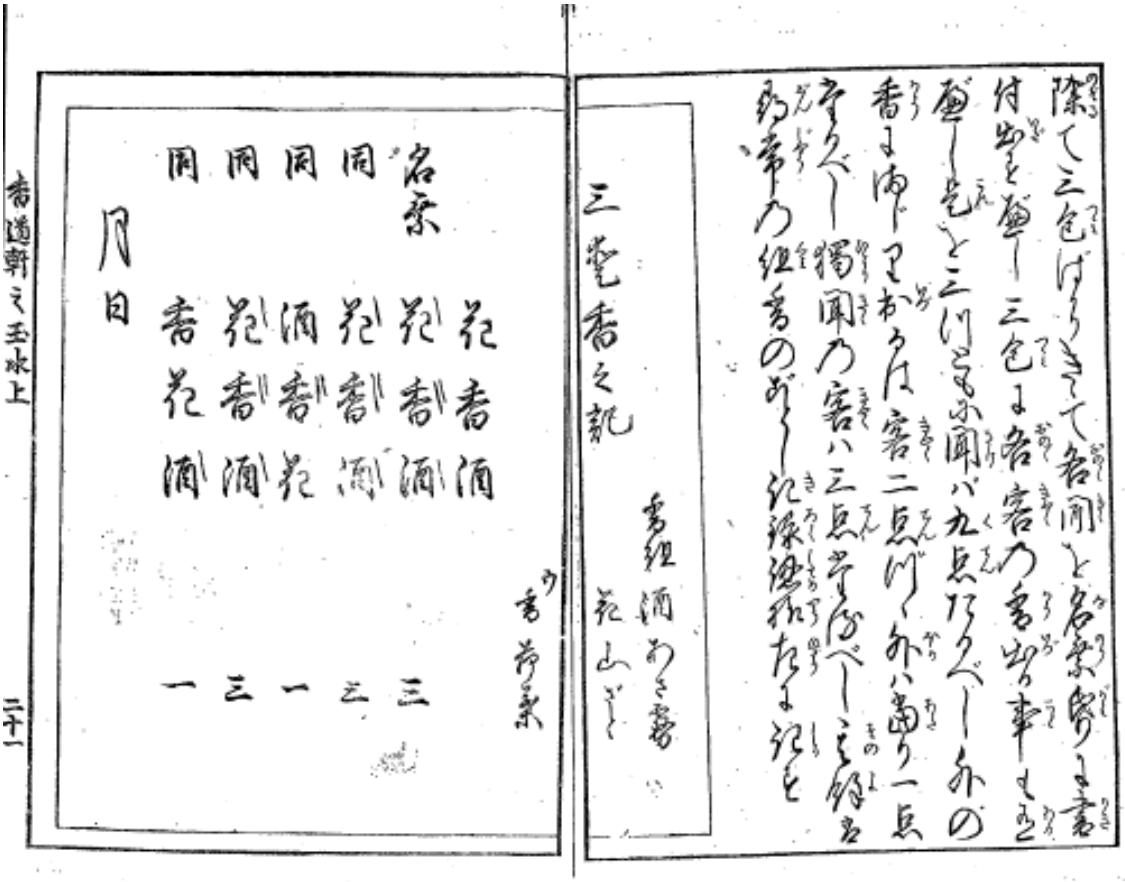
香三種也

「酒」と名付け　四包　「花」と名付け　四包

右の内一包ずつ試みに出す。

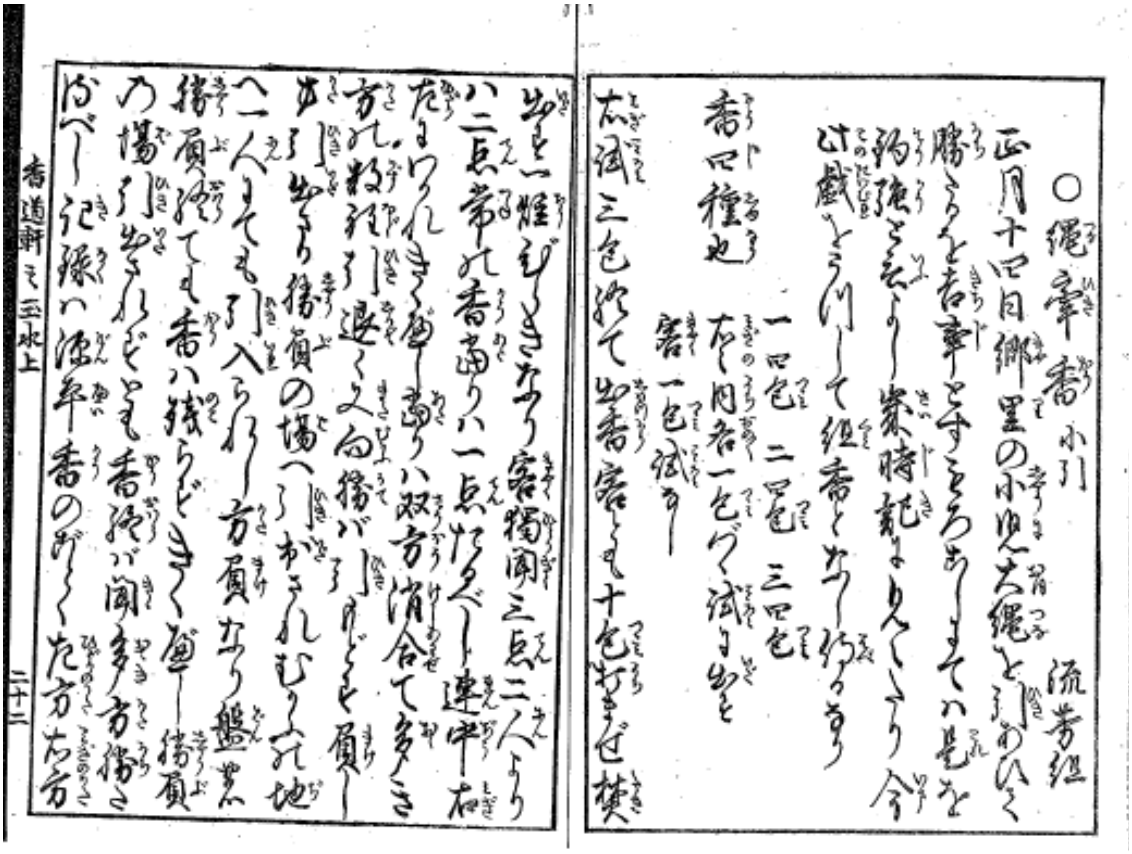
「香」と名付け　三包　試みなし。「客」なり。

右試み香二包終りて、出香九包打ちまぜ六包とり



除きて三包ばかり聞きて、各々聞きを名乗紙に書き付け出すべし。三包に各々「客」の香出る事も有るべし。これを三つともに聞けば九点たるべし。外の香にまじり出ずるは、「客」二点ずつ、外は当たり一点たるべし。独聞の「客」は三点たるべし。その餘は尋常の組香のごとし。記録認め様左に記す。

[三愛香之記]



○縄(綱)牽香(つなひきこう)小引　流芳組

正月十四日、郷里の小児、大綱を引きあいて、勝ちたるを吉事とす。もろこしにては、これを「釣強(ちょうこう)」と云うよし、歳時記に見えたり。今、この戯れをうつして組香となし侍るなり。

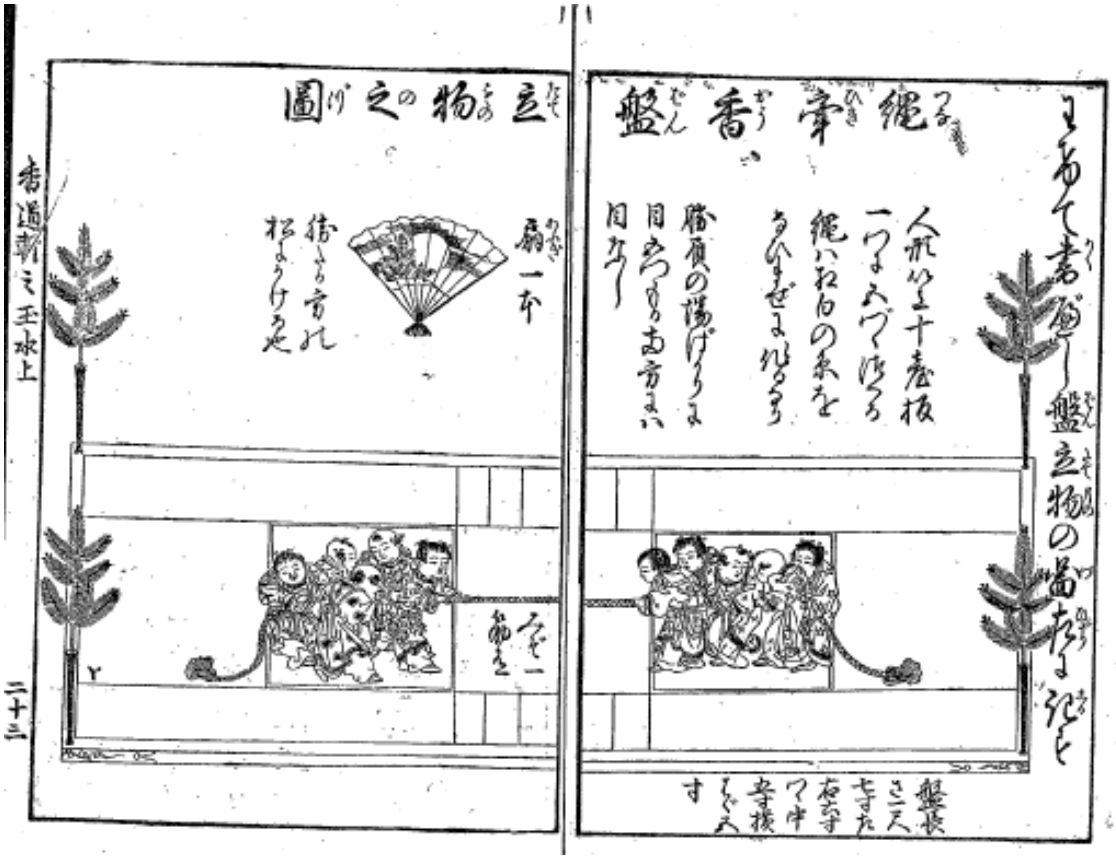
香四種也

「一」四包　「二」四包　「三」四包

右の内各一包ずつ試みに出す。

「客」一包　試みなし。

右試み三包終りて、出香「客」とも十包打ちまぜ焚き出す。「一炷びらき」なり。「客」、独聞三点、二人よりは二点。「常の香」、当たりは一点たるべし。連中、右左にわかれきくべし。当たりは、双方消し合わせて多き方の数程引き退く。また、向う勝てば引きもどす。負けし方、引き出さる。「勝負の場」へ引き出され、むこうの地へ一人にても引き入れられし方、「負」なり。盤の勝負終りても香は残らずきくべし。「勝負の場」、引き出されずとも、香終わらば、聞き多き方「勝」たるべし。記録は「源平香」のごとく「左方」、「右方」



わけて書くべし。盤立物の図左に記す。

［綱牽香盤立物の図］

「人形」以上十台、板一つに五ずつつくる

「縄」は紅白の糸をないまぜに作るなり。

「勝負の場」ばかりに目五つもる。

両方には目なし。

「扇」一本

勝ちたる方の「松」にかける也。

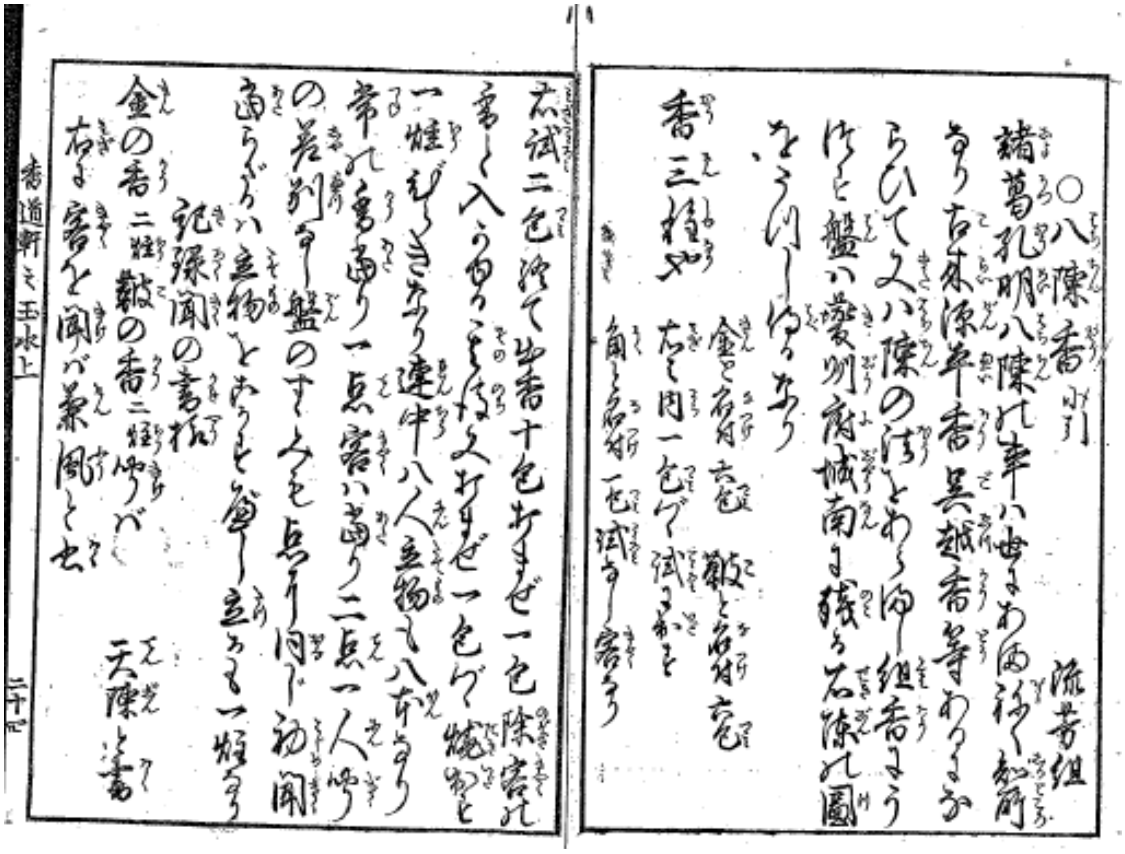
「盤」長さ一尺七寸

左右六寸ずつ

中五寸

横はば五寸

「みぞ」一筋あり。



○八陳香（はちじんこう）小引　流芳組

諸葛孔明、八陳の事は世にあまねく知る所なり。古来、「源平香」、「呉越香」等あるにならいて、また八陳の法をあらまし組香にうつす。盤は夔州府城南（きじゅうふじょうなん）に残る石陳の図をうつし侍るなり。

香三種也

「金（きん）」と名付け　六包　「鞁（こ）」と名付け　六包

右の内一包ずつ試みに出す。

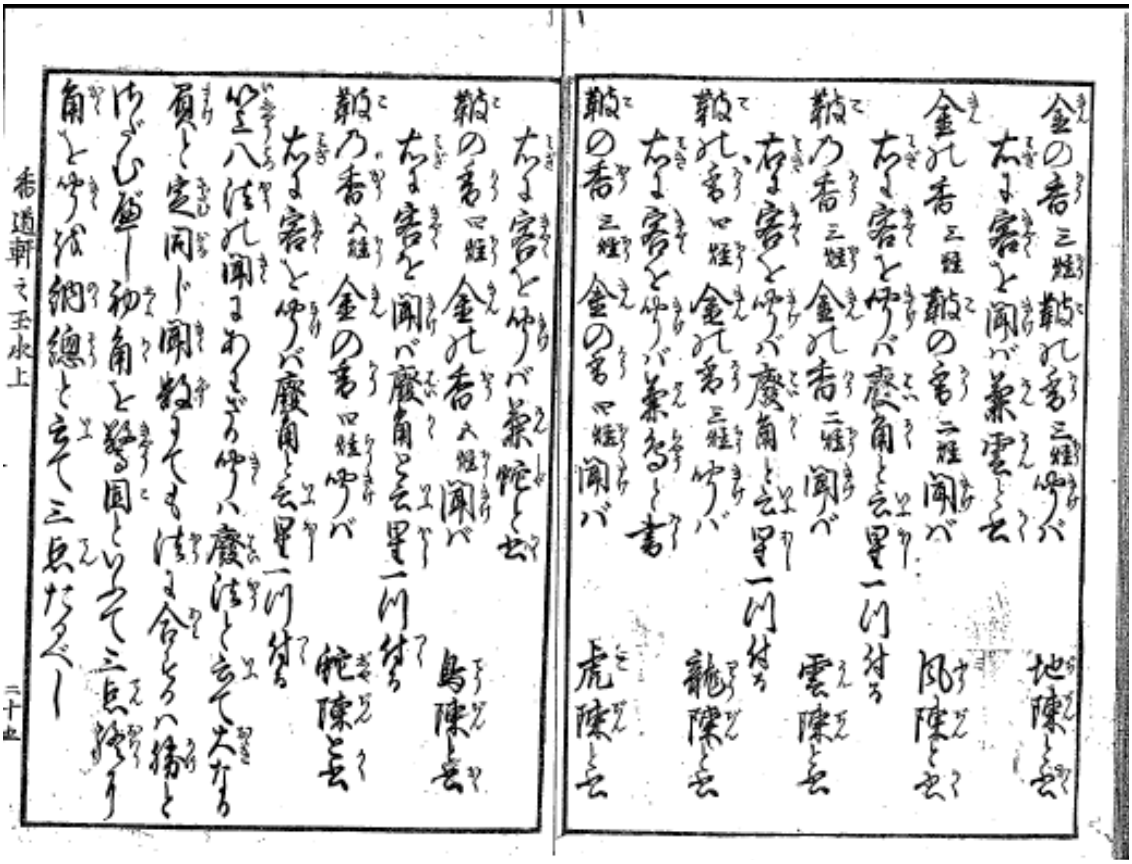
「角」（かく）と名付け　一包　試みなし。「客」なり。

右試み二包終りて、出香十包打ちまぜ一包除き、「客」の香と入れかゆる。その後、また打ちまぜ一包ずつ焼き出す。「一炷びらき」なり。連中八人、立物も八本なり。「常の香」当たり一点、「客」は当たり二点、一人聞きの差別なし。盤のすすみも点に同じ。初め聞き当たらざるは、立物をこかす（転）べし。立つるも一炷なり。

記録聞きの書き様

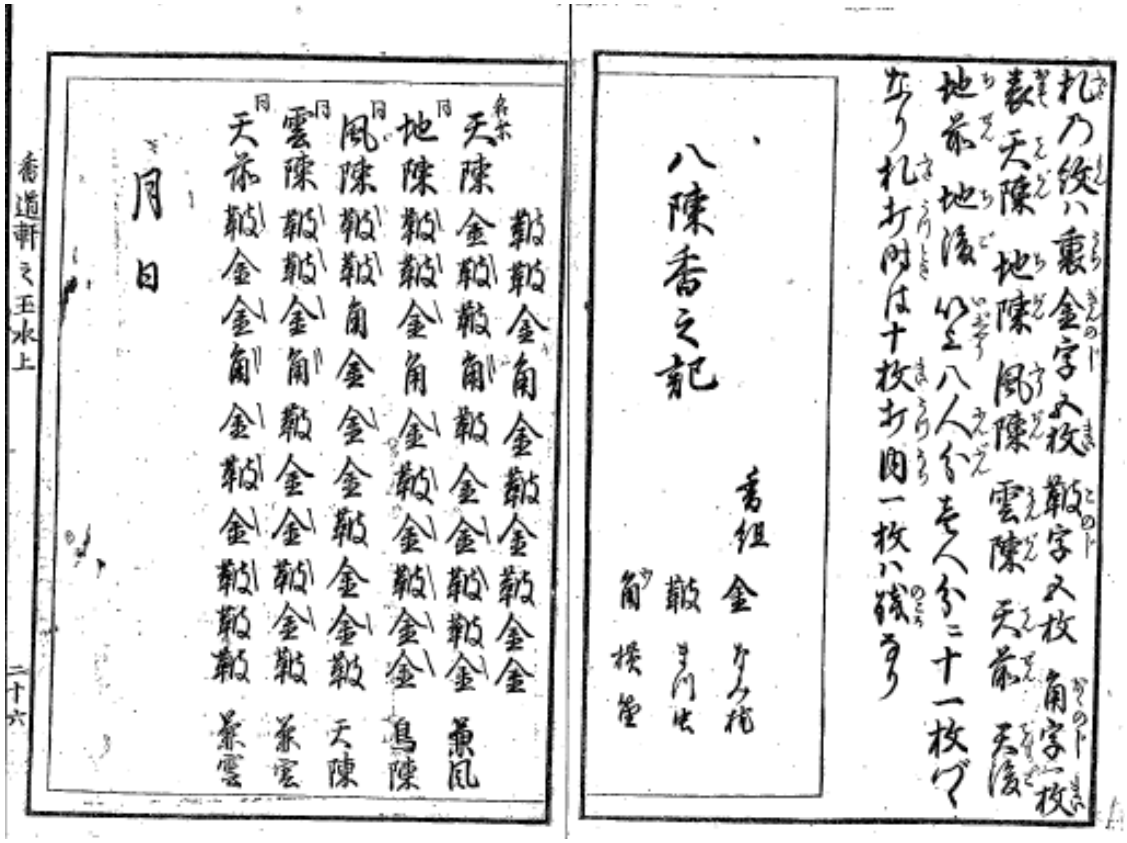
「金」の香二炷、「鞁」の香二炷聞けば、「天陳（てんじん）」と書く。

右に「客」を聞けば「兼風（けんふう）」と書く。



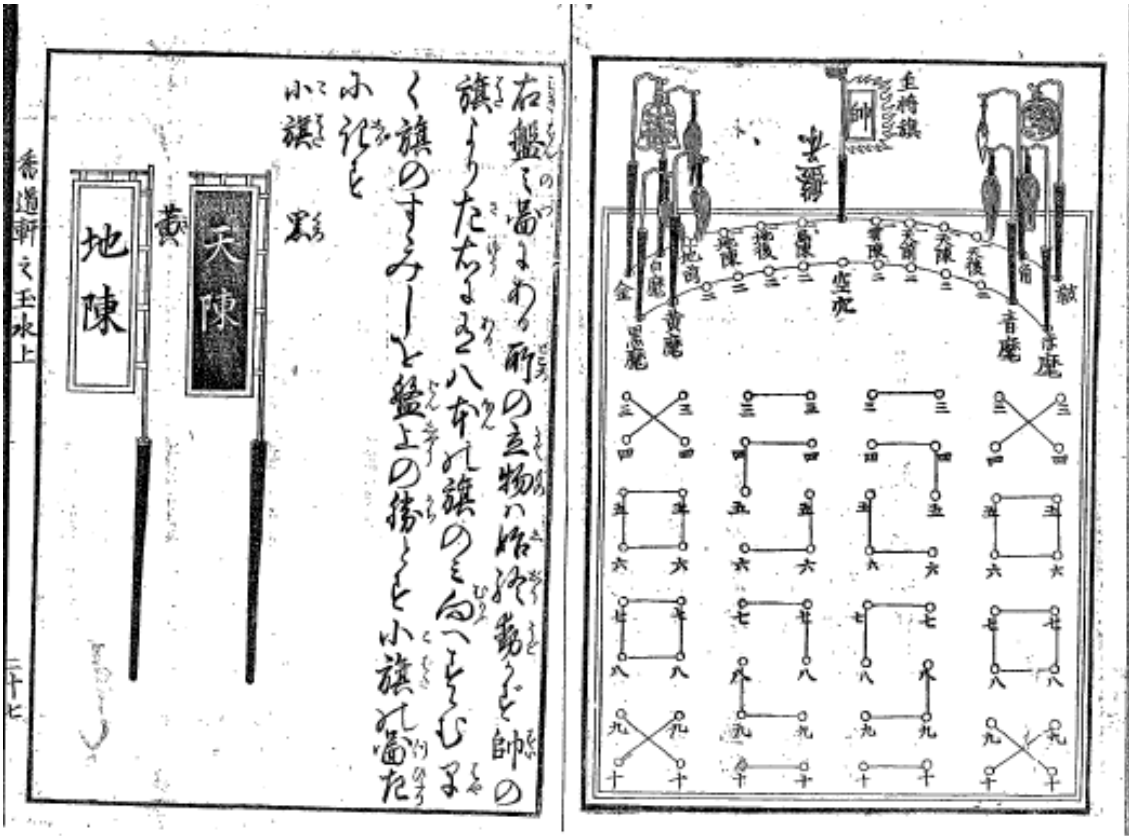
「金」の香三炷、「鞍」の香三炷聞けば、「地陳（ちじん）」と書く。
右に客を聞けば「兼雲（けんうん）」と書く。
「金」の香三炷、「鞍」の香二炷聞けば、「風陳（ふうじん）」と書く。
右に客を聞けば「廃角（はいかく）」と云う。星一つ付ける。
「鞍」の香三炷、「金」の香二炷聞けば、「雲陳（うんじん）」と書く。
右に客を聞けば「廃角（はいかく）」と云う。星一つ付ける。
「鞍」の香四炷、「金」の香三炷聞けば、「龍陳（りゅうじん）」と書く。
右に客を聞けば「兼鳥（けんちょう）」と書く。
「鞍」の香三炷、「金」の香四炷聞けば、「虎陳（こじん）」と書く。

右に客を聞けば「兼蛇（けんじゃ）」と書く。
「鞍」の香四炷、「金」の香五炷聞けば、「鳥陳（ちょうじん）」と書く。
右に客を聞けば「廃角（はいかく）」と云う。星一つ付ける。
「鞍」の香五炷、「金」の香四炷聞けば、「蛇陳（じゃじん）」と書く。
右に客を聞けば「廃角（はいかく）」と云う。星一つ付ける。
以上八法の聞きにあわざる聞きは「廃法（はいほう）」と云うて、大きなる
「負」と定む。同じ聞き数にても法に合わするは「勝」と
さだむべし。「初角（一炉目に出た角）」を「驚固（きょうこ）」という
て三点。終わりに
「角」を聞くを「納總（のうそう）」と云うて三点たるべし。



札の紋は、裏「金」の字　五枚　「皷」の字　五枚　「角」の字　一枚
表「天陳」「地陳」「風陳」「雲陳」「天前」「天後」
「地前」「地後」以上八人分。一人分に十一枚ずつ
なり。札、打つ時は十枚打つ、内一枚は残りなり。

［八陳香之記］



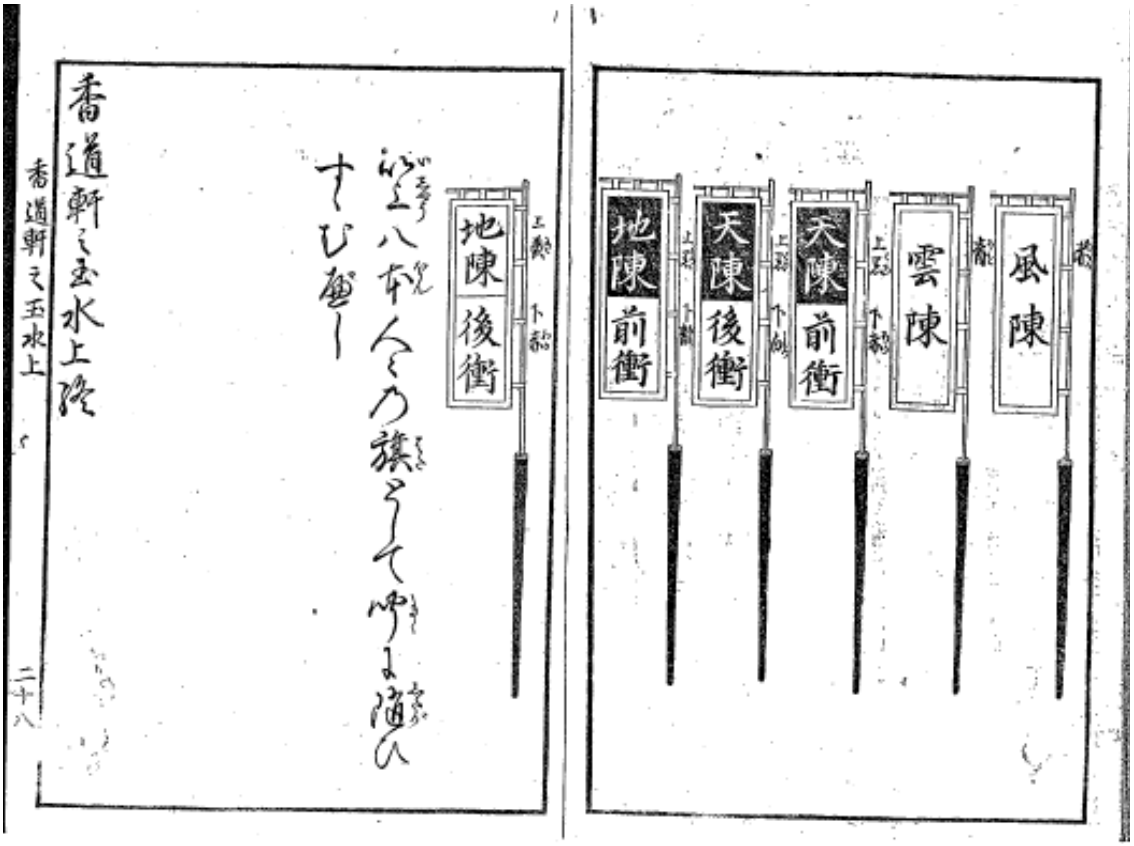
［八陳香盤の図］

右盤の図にある所の立物は、始終動かず。帥（すい）の旗より、左右に有る八本の旗のみ向うへすすむ。早く旗のすすみしを「盤上の勝」とす。小旗の図、左に記す。

小旗

黒 天陳

黄 地陳



赤 風陳
青 雲陳
上黒 下赤 天陳 前衝
上黒 下白 天陳 後衝
上黒 下青 地陳 前衝
上黄 下赤 地陳 後衝

以上八本、人々の旗として聞きに随いすすむべし。

香道軒之玉水上終り

【凡例】

① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。

② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。

③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。

④ 青字の（）は、筆者の補足です。

⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年五月

『香筵雅遊』國井和裕